

仙台平野の遺跡群 31

令和2年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

上杉六丁目遺跡第2次、小鶴城跡第11次
南小泉遺跡第87・88・89次、
中在家南遺跡第11次、北目城跡第9次

2021年3月

仙台市教育委員会

仙台平野の遺跡群 31

令和2年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

上杉六丁目遺跡第2次、小鶴城跡第11次
南小泉遺跡第87・88・89次、
中在家南遺跡第11次、北目城跡第9次

2021年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が残っております。これらの一つ一つは、先人たちが残した貴重な文化遺産です。

平成23年3月11日の東日本大震災より10年が経ち、復興・創生期間5年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届や発掘調査の件数は、平成23年度以降、震災前を上回る状況が継続しております。このようなかた、仙台市教育委員会といたしますは、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々務めているところです。

本報告書には、個人住宅建設に伴って令和元年度から令和2年度にかけて発掘調査を実施した、上杉六丁目遺跡第2次調査、小鶴城跡第11次調査、南小泉遺跡第87・88・89次調査、中在家南遺跡第11次調査、北目城跡第9次調査の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を将来へ伝えるために守るべき大切な財産です。先人たちの残した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であると思います。それは地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より感謝申し上げます。

令和3年3月

仙台市教育委員会
教育長 佐々木 洋

例　　言

1. 本書は、令和2年度個人住宅他国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書であり、上杉六丁目遺跡第2次、小鶴城跡第11次、南小泉遺跡第87・88・89次、中在家南遺跡第11次、北目城跡第9次の各発掘調査報告を合本したものである。
2. 本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は柳澤楓が行った。

第1章・第3章・第4章第4節・第5章・第8章－柳澤楓
第2章・第6章－木村恒　　第4章第2・3節－妹尾一樹　　第7章－庄子裕美
遺物の基礎整理－斎野裕彦、妹尾一樹、柳澤楓、木村恒、向田文化財整理収蔵室作業員
遺物図・遺構図デジタルトレース－向田文化財整理収蔵室作業員
遺構註記表作成－各担当職員、向田文化財整理収蔵室作業員
遺物写真撮影・図版作成－向田文化財整理収蔵室作業員　　遺構写真図版作成－妹尾一樹
3. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本文中の「～遺跡と周辺の遺跡」図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図を、また、「調査区位置図」などは仙台市発行の2千5百分の1都市基本図を、それぞれ修正して使用した。
2. 平面図中に示した方位は概ねの方位である。
3. 遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。

SR：河川跡　　SI：堅穴遺構　　SD：溝跡　　SK：土坑　　P：ピット　　SX：性格不明遺構
4. 遺物の略称は以下の通りである。

A：縄文土器　　C：土師器（非クロ調整）　　D：土師器（クロ調整）・赤焼土器　　E：須恵器
G：平瓦　　P：土製品
5. 土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原 1999）を使用した。
6. 遺構図に使用したトーンは以下の通りである。また、必要に応じて各図に凡例を付した。



7. 遺物実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。



8. ロクロ土師器・須恵器壺の中には内面のロクロ目の凹凸がナデ消され不明瞭になり器面が滑らかなものがある。これは「コテ状工具」による仕上げ調整によるものと推定されている。この痕跡の図化に際しては下図の通りにした。
- ・仙台市教育委員会 1987『五本松窯跡』仙台市文化財調査報告書第99集



9. 遺物写真の縮尺は遺物図版に掲載した同一個体のそれに準ずる。

目 次

| | |
|----------------|----|
| 第1章 調査計画と実績 | 1 |
| 第1節 調査体制 | 1 |
| 第2節 調査計画 | 1 |
| 第3節 調査実績 | 1 |
| 第2章 上杉六丁目遺跡の調査 | 3 |
| 第1節 遺跡の概要 | 3 |
| 第2節 第2次調査 | 3 |
| 第3章 小鶴城跡の調査 | 20 |
| 第1節 遺跡の概要 | 20 |
| 第2節 第11次調査 | 20 |
| 第4章 南小泉遺跡の調査 | 24 |
| 第1節 遺跡の概要 | 24 |
| 第2節 第87次調査 | 24 |
| 第3節 第88次調査 | 29 |
| 第4節 第89次調査 | 33 |
| 第5章 中在家南遺跡の調査 | 37 |
| 第1節 遺跡の概要 | 37 |
| 第2節 第11次調査 | 37 |
| 第6章 北目城跡の調査 | 40 |
| 第1節 遺跡の概要 | 40 |
| 第2節 第9次調査 | 40 |
| 第7章 郡山遺跡の調査 | 43 |
| 第8章 総括 | 44 |

挿図目次

| | |
|---------------------------------------|----|
| 第1図 令和元～2年度 調査地点位置図 (国土地理院地図を一部改変) | 12 |
| 2 第11図 第1次調査出土遺物（3） | 13 |
| 第2図 上杉六丁目遺跡と周辺の遺跡 | 14 |
| 3 第12図 第1次調査出土遺物（4） | 14 |
| 第3図 第2次調査区位置図 | 20 |
| 4 第13図 小鶴城跡と周辺の遺跡 | 20 |
| 第4図 第2次調査区配置図 | 21 |
| 4 第14図 第11次調査区位置図 | 21 |
| 第5図 第2次調査区平面・断面図 | 21 |
| 4 第15図 第11次調査区配置図 | 21 |
| 第6図 第2次調査II層出土遺物（1） | 22 |
| 6 第16図 第11次調査区平面・断面図 | 22 |
| 第7図 第2次調査II層出土遺物（2） | 22 |
| 7 第17図 SI1 壁穴遺構出土遺物 | 22 |
| 第8図 第1次調査出土遺物（1） | 24 |
| 10 第18図 南小泉遺跡と周辺の遺跡 | 24 |
| 第9図 第1次調査出土遺物（2） | 25 |
| 11 第19図 第87次調査区位置図 | 25 |

| | | | | | |
|--------|-----------------|----|--------|-----------------|----|
| 第 20 図 | 第 87 次調査区配置図 | 25 | 第 30 図 | SD1 溝跡出土遺物 | 35 |
| 第 21 図 | 第 87 次調査区平面・断面図 | 26 | 第 31 図 | 中在家南遺跡と周辺の遺跡 | 37 |
| 第 22 図 | 第 87 次調査出土遺物 | 27 | 第 32 図 | 第 11 次調査区位置図 | 38 |
| 第 23 図 | 第 88 次調査区位置図 | 29 | 第 33 図 | 第 11 次調査区配置図 | 38 |
| 第 24 図 | 第 88 次調査区配置図 | 29 | 第 34 図 | 第 11 次調査区平面・断面図 | 39 |
| 第 25 図 | 第 88 次調査区平面・断面図 | 30 | 第 35 図 | 北目城跡と周辺の遺跡 | 40 |
| 第 26 図 | 第 88 次調査出土遺物 | 31 | 第 36 図 | 第 9 次調査区位置図 | 41 |
| 第 27 図 | 第 89 次調査区位置図 | 33 | 第 37 図 | 第 9 次調査区配置図 | 41 |
| 第 28 図 | 第 89 次調査区配置図 | 33 | 第 38 図 | 第 9 次調査区平面・断面図 | 41 |
| 第 29 図 | 第 89 次調査区平面・断面図 | 35 | 第 39 図 | 郡山遺跡調査区位置図 | 43 |

挿表目次

| | | |
|-----|------------------------|----|
| 表 1 | 令和元年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧 | 1 |
| 表 2 | 令和2年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧 | 2 |
| 表 3 | 令和2年度 郡山遺跡発掘調査一覧 | 43 |

写真図版目次

| | | |
|---------|----------------------------------|----|
| 写真図版 1 | 上杉六丁目遺跡第2次調査 | 15 |
| 写真図版 2 | 上杉六丁目遺跡第2次調査出土遺物（1） | 16 |
| 写真図版 3 | 上杉六丁目遺跡第2次調査出土遺物（2）・第1次調査出土遺物（1） | 17 |
| 写真図版 4 | 上杉六丁目遺跡第1次調査出土遺物（2） | 18 |
| 写真図版 5 | 上杉六丁目遺跡第1次調査出土遺物（3） | 19 |
| 写真図版 6 | 小鶴城跡第11次調査・出土遺物 | 23 |
| 写真図版 7 | 南小泉遺跡第87次調査・出土遺物 | 28 |
| 写真図版 8 | 南小泉遺跡第88次調査・出土遺物 | 32 |
| 写真図版 9 | 南小泉遺跡第89次調査・出土遺物 | 36 |
| 写真図版 10 | 中在家南遺跡第11次調査 | 39 |
| 写真図版 11 | 北目城跡第9次調査 | 42 |

第1章 調査計画と実績

第1節 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

令和元年度

【文化財課】課長 長島栄一

| | | | | | |
|------------|-------|------|-------|-------|---------------|
| 【調査調整係】 | 係長 | 平間亮輔 | 主任 | 及川謙作 | |
| | 主事 | 妹尾一樹 | 相川ひとみ | 佐藤恒介 | 柳澤 楓 木村 恒 |
| | 文化財教諭 | 元山祐一 | 大友 渉 | 栗和田祥郎 | 尾形隆寛 専門員 斎野裕彦 |
| 【整備活用係】 | 係長 | 佐藤 淳 | 主任 | 小野寺啓次 | 高橋敬子 |
| | 主事 | 庄子裕美 | 五十嵐 愛 | | |
| | 文化財教諭 | 斎藤健一 | 三浦昂也 | 佐藤文征 | 専門員 渡部弘美 |
| 【仙台城史跡調査室】 | 室長 | 鈴木 隆 | 主任 | 間根章義 | 主事 佐藤恵理 須貝慎吾 |
| | 文化財教諭 | 加藤智仁 | 専門員 | 工藤哲司 | |

令和2年度

【文化財課】課長 長島栄一

| | | | | | |
|------------|----|-------|------|-----------|-----------|
| 【調査調整係】 | 係長 | 平間亮輔 | 主査 | 近藤勇亮 | 栗和田祥郎 |
| | 主任 | 及川謙作 | 小浦真彦 | 尾形隆寛 | |
| | 主事 | 澤目雄大 | 妹尾一樹 | 相川ひとみ | 柳澤 楓 木村 恒 |
| 【整備活用係】 | 係長 | 工藤慶次郎 | 主査 | 元山祐一 | 総括主任 高橋勝枝 |
| | 主任 | 堀越 研 | 佐藤文征 | 主事 庄子裕美 | 五十嵐 愛 |
| | 主事 | 佐藤恒介 | 主査 | 斎藤俊義 加藤智仁 | |
| 【仙台城史跡調査室】 | 室長 | 鈴木 隆 | 主任 | 斎藤俊義 | 加藤智仁 |
| | 主事 | 佐藤恒介 | 主査 | 須貝慎吾 | |

第2節 調査計画

主に個人専用住宅の建築に伴う発掘調査費用の補助を目的とし、「個人専用住宅補助事業費」として、令和2年度は総額5,656千円（このうち補助金額2,828千円）の予算で20件の調査を計画した。

第3節 調査実績

令和元年度から令和2年度（令和2年1月～令和2年12月）にかけて実施した調査は表1・2の通りで、合計31件である。このうち本書に収録したのは表に示した5件と令和元年5月～12月に実施した2件の計7件である。

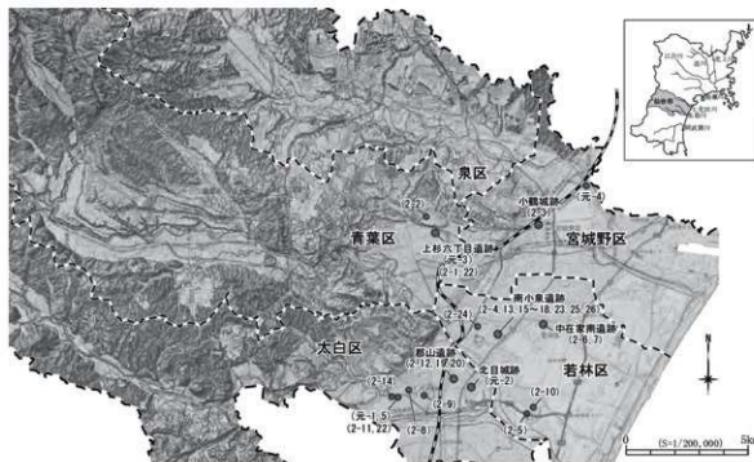
表1 令和元年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧

（令和2年1月～3月）

| 番号 | 調査地名 | 遺跡名 | 所在地 | 対象面積 (m ²) | 調査面積 (m ²) | 調査期間 | 遺構・遺物 | 届出等No. | 報告書 |
|----|--------|---------|----------------------|---------------------------|---------------------------|------------|-----------------|-------------|-----|
| 1 | H31-56 | 霞沢断跡 | 太白区霞沢駅西土地区画整理事業地 32B | 72.45 m ² | 12.0 m ² | 1月 10日～14日 | ビット2, 遺物なし | H31 101-370 | — |
| 2 | H31-59 | 北日輪跡 | 太白区霞山字北日輪地 | 57.13 m ² | 6.0 m ² | 1月 27日 | 遺跡1, 遺物なし | H31 101-419 | 第9次 |
| 3 | H31-62 | 上杉六丁目遺跡 | 青葉区上杉6丁目 | 84.67 m ² | 12.0 m ² | 3月 2日～3日 | 遺構なし, 遺物跡、土師器、瓦 | H31 101-237 | 第2次 |
| 4 | H31-63 | 酒ノ井遺跡 | 宮城野区酒井字酒井 | 57.96 m ² | 5.0 m ² | 3月 9日 | 遺構なし | H31 101-455 | — |
| 5 | H31-64 | 霞沢断跡 | 太白区霞沢字霞 | 78.55 m ² | 12.0 m ² | 3月 16日 | 遺構面まで調査せず | H31 101-467 | — |

表2 令和2年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧 (令和2年4月～12月)

| 調査番号 | 調査地名 | 所在地 | 対象面積 (m ²) | 調査面積 (m ²) | 調査期間 | 遺構・遺物 | 届出番号 | 報告書 | |
|------|-------|---------|---------------------------|---------------------------|----------------------|--------------|-----------------------------|-------------|-------|
| 1 | R2-1 | 上杉六丁目遺跡 | 青葉区上杉6丁目 | 69.6 m ² | 8.8 m ² | 4月7日 | 遺構面まで到達せず | R01 101-068 | — |
| 2 | R2-2 | 穴田更賀跡 | 青葉区堀町2丁目 | 67.1 m ² | 13.4 m ² | 4月21日 | 遺構・遺物なし | R2 101-9 | — |
| 3 | R2-3 | 小鶴城跡 | 宮城野区新田3丁目 | 54.9 m ² | 12.0 m ² | 4月22～23日 | 柱穴遺構1、土師器 | R01 101-025 | 第11次 |
| 4 | R2-4 | 衛小泉遺跡 | 若林区瀬見塚2丁目 | 76.1 m ² | 12.0 m ² | 5月11～14日 | 柱穴遺構2、土坑1、ピット4、土器 | R2 101-5 | 第89次 |
| 5 | R2-6 | 高田A遺跡 | 若林区上板塚3丁目 | 57.9 m ² | 12.0 m ² | 5月11日 | 遺構なし、遺物很少 | R2 101-26 | — |
| 6 | R2-7 | 中在家南遺跡 | 若林区荒井1丁目 | 46.4 m ² | 12.6 m ² | 5月18日 | 遺構・遺物なし | R2 101-25 | — |
| 7 | R2-8 | 中在家南遺跡 | 若林区荒井1丁目 | 53.8 m ² | 12.0 m ² | 5月22～26日 | 河岸跡1、遺物なし | R2 101-24 | 第11次 |
| 8 | R2-9 | 下ノ内遺跡 | 太白区長町南4丁目 | 88.7 m ² | 12.0 m ² | 5月25日 | 遺構面まで到達せず | R2 101-37 | — |
| 9 | R2-11 | 大野田古墳群 | 太白区大野田3丁目 | 75.8 m ² | 12.65 m ² | 6月1日 | 遺構・遺物なし | R2 101-35 | — |
| 10 | R2-12 | 今泉遺跡 | 若林区今泉2丁目 | 75.8 m ² | 15.0 m ² | 6月2～3日 | 柱穴1、遺跡1、遺物少量 | R2 101-58 | 次年度以降 |
| 11 | R2-16 | 富沢城跡 | 太白区富沢字宇船 | 59.8 m ² | 12.0 m ² | 7月7～8日 | 柱穴1、遺跡1、ピット1、土器 | R2 101-114 | 次年度以降 |
| 12 | R2-17 | 鶴山遺跡 | 太白区鶴山3丁目 | 49.5 m ² | 13.2 m ² | 7月20～21日 | 遺跡1、ピット3、遺物很少 | R2 101-111 | 第204次 |
| 13 | R2-23 | 衛小泉遺跡 | 若林区古塚3丁目 | 53.3 m ² | 12.0 m ² | 9月8～9日 | 柱穴遺構2、陶器など | R2 101-160 | — |
| 14 | R2-24 | 宮城御陵碑接地 | 太白区宮城駅西 | 79.3 m ² | 15.0 m ² | 9月15～16日 | 柱穴遺構1、土師器 | R2 101-139 | 次年度以降 |
| 15 | R2-25 | 衛小泉遺跡 | 若林区一本町 | 39.7 m ² | 15.0 m ² | 10月6～14日 | 柱穴建物跡、遺跡1、土坑1、ピット9、土師器 | R2 101-177 | 次年度以降 |
| 16 | R2-26 | 衛小泉遺跡 | 若林区一本町 | 39.7 m ² | 16.5 m ² | 9月29日～10月6日 | 柱穴柱跡3、土坑8、ピット6、土器跡、瓦質器、陶器 | R2 101-178 | 次年度以降 |
| 17 | R2-27 | 衛小泉遺跡 | 若林区一本町 | 59.6 m ² | 20.2 m ² | 9月28日～10月14日 | 柱穴柱跡3、土坑8、ピット6、土器跡、瓦質器、陶器など | R2 101-190 | 次年度以降 |
| 18 | R2-28 | 衛小泉遺跡 | 若林区一本町 | 59.6 m ² | 15.0 m ² | 9月28～29日 | ピット1、土師器 | R2 101-191 | — |
| 19 | R2-31 | 鶴山遺跡 | 太白区鶴山4丁目 | 63.5 m ² | 9.9 m ² | 10月27～28日 | 遺構なし、土師器 | R2-101-162 | 第267次 |
| 20 | R2-32 | 鶴山遺跡 | 太白区鶴山3丁目 | 51.4 m ² | 22.6 m ² | 11月4～8日 | 柱穴住居1、土坑1、土師器、瓦、土器品 | R2-101-226 | 第308次 |
| 21 | R2-33 | 富沢城跡 | 太白区富沢字宇船 | 59.6 m ² | 12.0 m ² | 11月4日 | 遺構なし、遺物很少 | R2 101-230 | — |
| 22 | R2-34 | 上杉六丁目遺跡 | 青葉区上杉6丁目 | 71.5 m ² | 9.0 m ² | 11月11日 | 遺構面まで到達せず | R2 101-260 | — |
| 23 | R2-36 | 衛小泉遺跡 | 若林区瀬見塚2丁目 | 85.7 m ² | 14.0 m ² | 11月24日 | ピット7、遺物なし | R2 101-282 | — |
| 24 | R2-37 | 黄楓園遺跡 | 若林区衛小泉1丁目 | 79.5 m ² | 12.0 m ² | 12月1日 | 遺構・遺物なし | R2 101-285 | — |
| 25 | R2-39 | 衛小泉遺跡 | 若林区瀬見塚1丁目 | 66.4 m ² | 10.0 m ² | 12月14～21日 | 柱穴遺構1、土坑3、ピット1、土器跡、瓦質器など | R2 101-305 | 次年度以降 |
| 26 | R2-40 | 衛小泉遺跡 | 若林区瀬見塚2丁目 | 51.6 m ² | 12.0 m ² | 12月16日～22日 | 柱穴不明遺構1、ピット7、土器跡、石器 | R2 101-312 | — |



第1図 令和元～2年度 調査地点位置図（国土地理院地図を一部改変）

第2章 上杉六丁目遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

上杉六丁目遺跡は、JR 北仙台駅の南東約 0.7 km に位置する。遺跡の範囲は、東西約 105m、南北約 85m であり、梅田川南岸に形成された、標高約 43m の自然堤防上に立地する。梅田川を挟んで、近世の窯跡として知られる杉添東窯跡に隣接する。上杉六丁目遺跡の北側には、七北田丘陵が広がっており、仙台市街に面した南斜面には多くの窯跡が分布し、「台原・小田原窯跡群」と呼称され、東北でも有数の窯業地帯として知られている。上杉六丁目遺跡では、これまで本発掘調査は行われていないが、昭和 53 年の社員寮建設の際に、平安時代の土師器・須恵器・瓦などの遺物が、梅田川旧河床の砂層から多量に確認されている。

第2節 第2次調査

1. 調査要項

| | |
|--------|----------------------|
| 遺跡名 | 上杉六丁目遺跡 (01324) |
| 調査地点 | 仙台市青葉区上杉六丁目 526-12 |
| 調査期間 | 令和2年3月3日～3月4日 |
| 調査対象面積 | 84.67 m ² |
| 調査面積 | 12 m ² |
| 調査原因 | 個人住宅建築工事 |
| 調査主体 | 仙台市教育委員会 |
| 調査担当 | 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係 |
| 担当職員 | 主事 木村 恒 文化財教諭 元山祐一 |

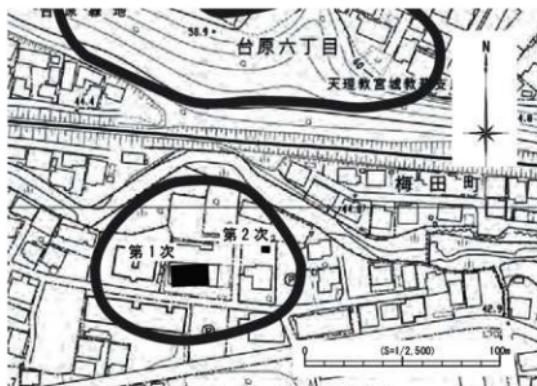
2. 調査に至る経過と調査方法

本件は、申請者より令和元年 11 月 11 日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和元年 11 月 18 日付 H31 教生文第 101-337 号で通知)に基づき実施した。

調査区は建築範囲内に 12 m² (3 m × 4 m) の規模で設定した。重機により盛土を除去したところ、調査区の東側



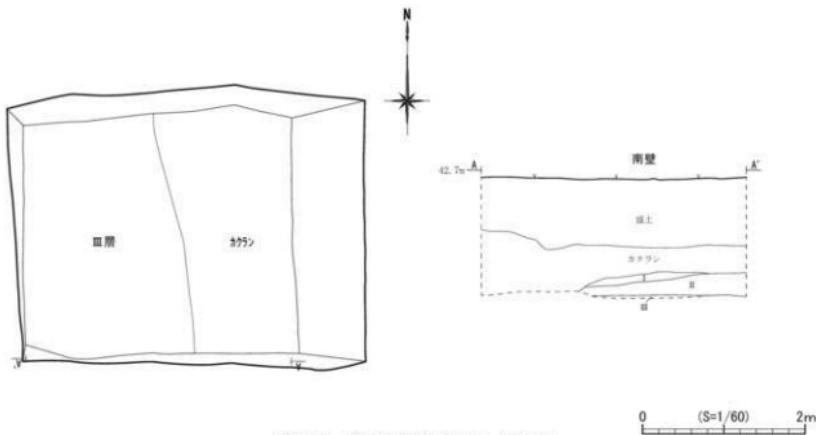
第2図 上杉六丁目遺跡と周辺の遺跡



第3図 第2次調査区位置図



第4図 第2次調査区配置図



第5図 第2次調査区平面・断面図

で GL-1.5m 以上に及ぶ擾乱が認められた。II 層上面 (GL-1.4m 程度) で遺構確認作業を行った結果、遺構は確認されなかった。なお、精査中に II 層上面から土師器・須恵器片が出土し、II 層中にも遺物が含まれることが予想されたため、II 層を人力で掘り下げたところ、砂層である II 層下部～III 層上面にかけて、土師器・須恵器・瓦等の遺物が多く認められた。建築計画の杭の長さの関係から、GL-1.5m が掘削の限界であったため、調査区全体を GL-1.5m まで掘り下げ、遺物の回収に努めた。

今回の調査では調査区平面図 (1/20)、調査区南壁断面図 (1/20) を作成し、記録写真はデジタルカメラにて撮影した。記録作業終了後、重機により複数回の締固めを行いながら埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では、厚さ約 1.4m の盛土の下に、基本層を 3 層確認した。

- I 層 : 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト。10YR6/1 粘土を斑状に含み、小礫を少量含む。部分的に残存する。
- II 層 : 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂。下部ほど砂粒が大きい。小礫（φ～5 cm程度）を多量に含む。この層の下部からIII層にかけて多量に土器片等の遺物が出土した。粗砂を基本として細砂との互層になっている。
- III 層 : 7.5YR5/8 明褐色粗砂。II層よりも砂の粒が粗い。小礫（φ～5 cm）を多量に含む。上面付近で遺物が確認されている。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、II層上面で遺構確認作業を行ったが、遺構は検出されなかつた。

遺物はいずれもII層～III層より出土した。特にII層下部～III層上面で多く確認されており、今回の調査における掘削深度限界のGL-1.5m付近でも遺物が認められている。

遺物はロクロ土師器を主体として、須恵器、瓦、赤焼土器、土製品、陶器、磁器、繩文土器が出土した。そのうち、ロクロ土師器9点、須恵器11点、瓦1点、繩文土器1点を掲載した（第6、7図、写真図版2、3）。ロクロ土師器は、壺、高台付壺、甕、高盤で構成され、須恵器には壺、高台付壺、甕が認められる。

図示したロクロ土師器9点の内訳は、壺2点、高台付壺1点、甕5点、高盤1点である。第6図1、2は壺である。1は体部から口縁部にかけてやや内弯気味に外傾しており、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。2では、ロクロ目の凹凸を滑らかにする調整が内面底部から口縁部にかけて施され、調整面と非調整面との境界で窪みができる。全体的に均質に明黄褐色を呈することから、酸化炎焼成による須恵器の可能性もある。3は高台付壺であり、高台部の破片資料である。11は高盤である。脚部が残存しており、胴部と体部の境界が段状になっている。内面にはロクロナデの後にナデ、ヘラミガキによる調整が施されている。第6図12、13、第7図1、2、3は甕である。第6図12、13、第7図1は口縁部の資料であり、口縁部が「く」の字状に屈曲して外反し、外面・内面に回転ハケメやヘラナデによる調整が施されている。第7図2は底部、3は胴部の資料であり、外面にヘラケズリ、内面にハケメによる調整が認められる。

図示した須恵器11点の内訳は、壺7点、高台付壺1点、甕3点である。第6図4～10は壺である。体部はやや丸味を帯びて立ち上がるものと、比較的直線的に外傾するものがあり、口縁部は丸く収束するものと、やや外反するものが認められる。4、5、7、9については、内面が平滑になるように調整が施されている。第7図6は高台付壺である。第7図4、5、7は甕であり、4、5は外面に平行タタキ目、内面に回転ハケメとヘラナデが認められる。

第7図9は平瓦であり、瓦はこの1点のみ出土した。回面には布目が認められ、ナデが施されており、凸面には繩タタキ目が確認され、タタキ目のつぶれが見られた。第7図8は繩文土器の深鉢の破片であり、羽状繩文が認められ、内面にはミガキが見られる。

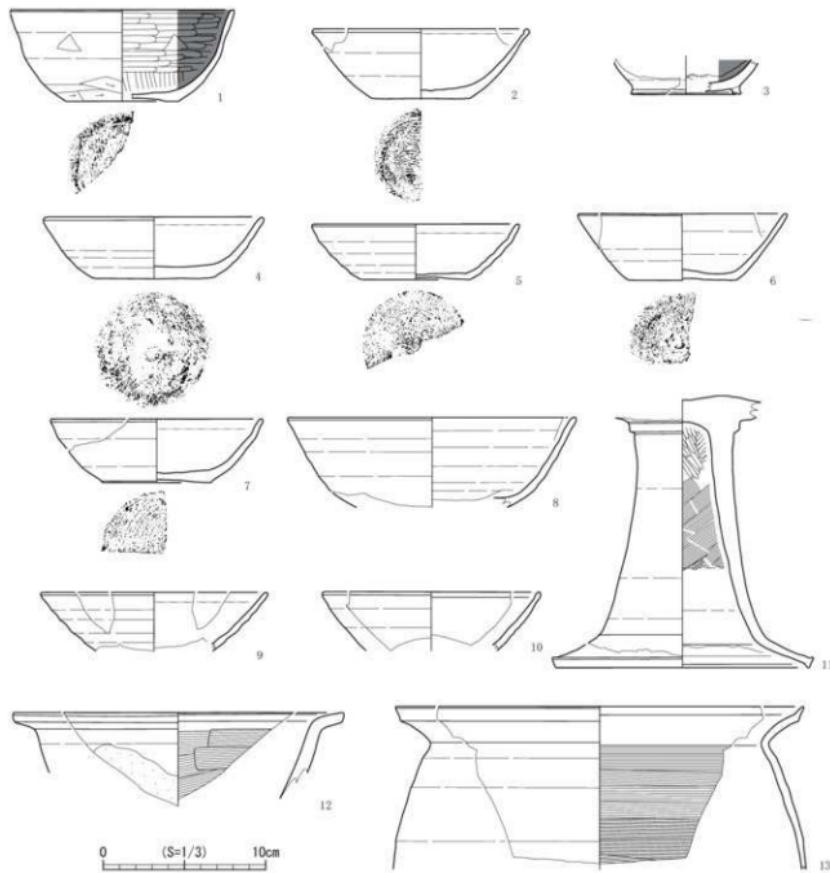
また、掲載外の破片資料はロクロ土師器220点、須恵器32点、赤焼土器1点、土製品2点、陶器1点、磁器1点、繩文土器1点、樹木片2点の計259点となっている。

5. 第1次調査出土の遺物

ここでは、昭和53年の現地調査を第1次調査と位置づけ、未報告出土遺物について取り上げる。第1次調査は、工事に伴う掘削の現地立会調査である。この掘削は10m×20mで行われ、建物基礎の下、地下約250cmの砂層から須恵器、土師器などの遺物が多数出土した。地下約250cmで到達する砂層の直上には、暗灰色のグライ化した粘土が堆積する。遺物は砂層から出土し、旧梅田川河床に混入していたものと考えられ、この調査で確認された砂層は、第2次調査のII層、III層に対応する可能性がある。

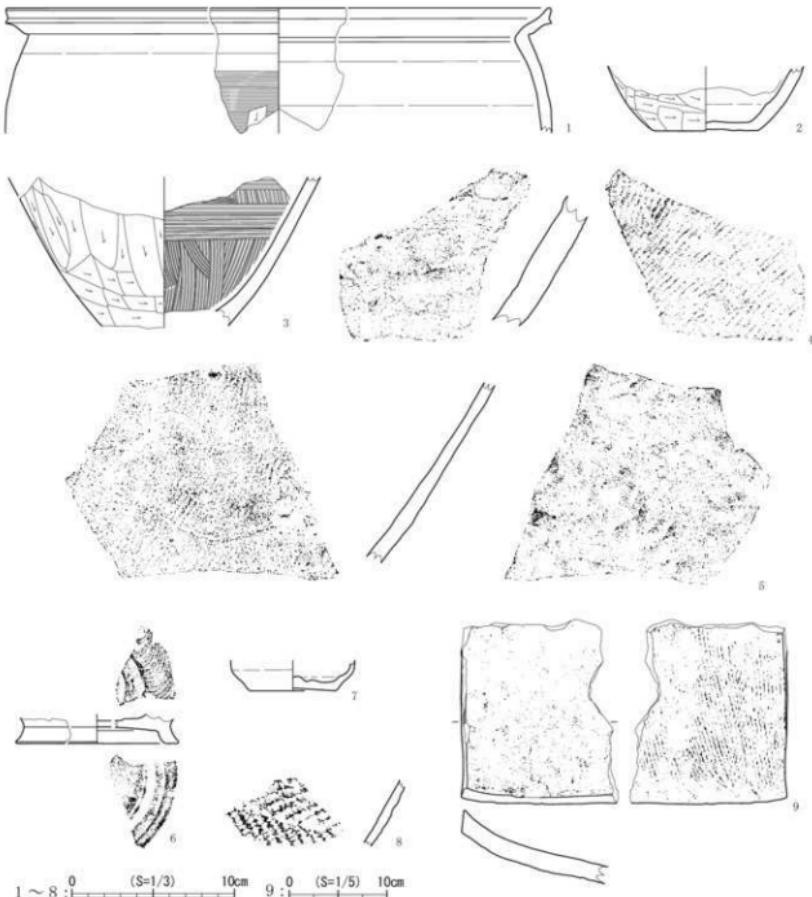
この調査ではロクロ土師器を主体として、須恵器、鉄製品、瓦が出土した。ロクロ土師器には壺、高台付壺、甕、

第2節 第2次調査



| 図版 番号 | 書籍 番号 | 種類 | 特徴 | 法量(cm) | | | 外観 | 内面 | 備考 | 写真 説明 |
|----------|----------|-----|----------|--------|--------|--------|---|--------------------------------|--------------------|----------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | |
| 1 | D-2 | 土師器 | 坪 | (13.6) | (6.8) | 5.6 | ロクロナダ→底下端：手持ちへラケズリ 或：回転 内側切一凹頭部：手持ちへラケズリ | ハラミガキ・黒色処理 | 胎土繊維 砂粒含む 底／口：D.30 | 2-1 |
| 2 | D-5 | 土師器 | 坪 | (13.0) | (6.0) | 4.3 | ロクロナダ | ロクロナダ→コテあて 調整 | 胎土繊維 砂粒含む 底／口：D.40 | 2-2 |
| 3 | D-9 | 土師器 | 圓台付 坪 | — | (6.7) | (2.3) | ロクロナダ 減：ナダ | ハラミガキ・黒色処理 | 胎土繊維 砂粒含む | 2-3 |
| 4 | E-1 | 瓦器類 | 坪 | (13.6) | 7.4 | 3.8 | ロクロナダ 減：回転手へラケズリ 無調整 | ロクロナダ→コテあて 調整 | 胎土繊維 砂粒含む 底／口：D.54 | 2-4 |
| 5 | E-2 | 瓦器類 | 坪 | (12.8) | (6.40) | 3.4 | ロクロナダ 減：回転手切り 無調整 | ロクロナダ→コテあて 調整 | 胎土繊維 砂粒含む 底／口：D.52 | 2-5 |
| 6 | E-3 | 瓦器類 | 坪 | (12.8) | (6.40) | 4.1 | ロクロナダ 減：回転へラカ切り 無調整 | ロクロナダ | 胎土繊維 砂粒含む 底／口：D.50 | 2-6 |
| 7 | E-4 | 瓦器類 | 坪 | (12.8) | (6.0) | 3.3 | ロクロナダ 減：回転手切り 無調整 | ロクロナダ→口～体：コテあて 調整 | 胎土繊維 砂粒含む 底／口：D.52 | 2-7 |
| 8 | E-5 | 瓦器類 | 坪 | (17.8) | — | (3.3) | ロクロナダ | ロクロナダ コテあて 調整 | 胎土繊維 砂粒含む | 2-8 |
| 9 | E-6 | 瓦器類 | 坪 | (13.8) | — | (3.6) | ロクロナダ | ロクロナダ | 胎土繊維 砂粒含む | 2-9 |
| 10 | E-7 | 瓦器類 | 坪 | (13.2) | — | (3.6) | ロクロナダ | ロクロナダ | 胎土繊維 砂粒含む | 2-10 |
| 11 | D-6 | 土師器 | 高盤 | — | (15.6) | (16.7) | ロクロナダ | 底：ロクロナダ 壁：ロクロナダ ロクロナダ→ハラミガキ | 胎土繊維 砂粒含む | 2-11 |
| 12 | D-7 | 土師器 | 坪 | (20.4) | — | (5.8) | ロクロナダ | ハラナダ | 胎土繊維 砂粒含む | 2-12 |
| 13 | D-3 | 土師器 | 坪 | (25.0) | — | (10.0) | ロクロナダ | 口：ロクロナダ 体：ロクロナダ ロクロナダ→ハラミガキ | 胎土繊維 砂粒含む | 2-13 |

第6図 第2次調査II層出土遺物（1）



| 実証 番号 | 登録 番号 | 種別 | 基準 | 法量(cm) | | | 外面 | 内面 | 備考 | 写真 図版 |
|----------|----------|------|----------|--------|-------|--------|-------------------------------|-----------------|----------|----------|
| | | | | 口径 | 高さ | 厚さ | | | | |
| 1 | D-8 | 土器部 | 東 | (33.1) | - | (7.7) | 口へ体上：ロクロナゲ 体中：凹凸ハケメ→手持ち ハラクズリ | ロクロナゲ | 粘土質 砂粒含む | 2-14 |
| 2 | D-1 | 土器部 | 東 | - | 6.4 | (4.1) | 口下～底 手持ハラクズリ | ロクロナゲ | 粘土質 砂粒含む | 2-15 |
| 3 | D-4 | 土器部 | 東 | - | - | (0.2) | 手持ハラクズリ | ハケメ→凹凸ハケメ | 粘土質 砂粒含む | 2-16 |
| 4 | E-9 | 土器部 | 東 | - | - | (0.0) | 平行タタキ目 | 凹凸ハケメ→ハナゲ | 粘土質 砂粒含む | 2-17 |
| 5 | E-6 | 土器部 | 東 | - | - | (11.0) | 平行タタキ目 | 凹凸ハケメ→ハナゲ | 粘土質 砂粒含む | 3-1 |
| 6 | E-11 | 土器部 | 高台付 井 | - | (0.9) | (1.8) | 手・井・ロクロナゲ 井：ロクロナゲ 凹凸ハラナゲ | ロクロナゲ・小凸ハラナゲ | 粘土質 砂粒含む | 3-2 |
| 7 | E-10 | 土器部 | 東 | - | 5.2 | (1.0) | ロクロナゲ 井：手持ちハラクズリ | ロクロナゲ | 粘土質 砂粒含む | 3-3 |
| 8 | A-1 | 陶文土器 | 西林 | - | - | (4.0) | 田比溝文(3.8cm) | ミガキ・エザカルヒニ彌縫を含む | 粘土質 砂粒含む | 3-4 |

| 実証 番号 | 登録 番号 | 種別 | 基準 | 法量(cm) | | | 備考 | 写真 図版 |
|----------|----------|----|----|--------|--------|-----|----------------------------|----------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| 9 | G-1 | 瓦 | 平瓦 | (18.9) | (16.0) | 2.0 | 画面：面目→ナゲ 内面：調タタキ目→タタキ目につぶれ | 3-5 |

第7図 第2次調査II層出土遺物（2）

壺、瓶が認められ、須恵器には坏、高台付坏、甕、壺が認められた。そのうち、ロクロ土師器 26 点、須恵器 20 点、瓦 1 点を掲載した（第8～12 図、写真図版 3～5）。

図示したロクロ土師器 26 点の内訳は、坏 14 点、高台付坏 2 点、甕 9 点、瓶 1 点である。第8 図 1, 15 は高台付坏である。1 は高台部が剥離しており、内面・外面ともに黒色を呈しており、口縁部がやや外反する。第8 図 2～14 は坏であり、基本的に内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。体部はやや丸みをもって外傾しており、口縁部も大きく外反・内窪せずに丸く収束する。第10 図 1, 3～11 は甕である。口縁部は「く」の字状に外反しており、調整はロクロナデを基本として、体部下端部に手持ちヘラケズリが施されているものが見られる。また、内面には回転ハケメやナデによる調整が見られるほか、ヘラミガキと黒色処理が施されるものが認められる。5 は頸部から胴部にかけてくびれており、体部が丸みを帯びて張り出している。6 では、回転ハケメが施されているが、器面の歪みによって、回転ハケメが当たらなかった箇所で回転ハケメ以前のロクロナデが確認される。第10 図 2 は瓶であり、口縁部が残存している。

図示した須恵器 20 点の内訳は、坏 10 点、高台付坏 1 点、壺 5 点、甕 4 点である。第9 図 1～10 は坏である。体部がやや丸みをもって外傾するものと、直線的になっているものが見られ、口縁部が丸く収束するものと、やや外反するものが認められる。1 は体部外面に墨書きが認められる。3, 5, 8 では、内面が平滑でロクロ目が不明瞭になっており、8 の底部内面中央部には内面調整の際にできたと考えられる高まりができている。11 は高台付坏である。第11 図 1, 5, 6、第12 図 1, 2 は壺である。第12 図 2 は大型のもので、全体の 1/4 程度が残存し、外側にはヘラケズリと下端部に平行タタキが施され、内面にはナデによる調整が施されている。第11 図 2～4, 7 は甕であり、口縁部と胴部の資料が認められている。

第12 図 3 は平瓦であり、凸面に縄タタキ目、凹面にナデと木目の圧痕が認められる。

また、掲載外の破片資料には、ロクロ土師器 181 点、須恵器 26 点、鉄製品 1 点、計 208 点がある。第2次調査資料と同様、数量的にロクロ土師器が主体となっていることが窺える。

6.まとめ

第2次調査地点は、上杉六丁目遺跡の東部に位置する。今回の調査では GL-1.4m の II 層上面で遺構確認作業を行ったが、遺構は認められなかった。最終的に GL-1.5m まで掘削したところ、II 層～III 層の砂層中から土師器、須恵器などの古代の遺物が出土した。出土遺物は砂層中に混入しており、不規則な状態で検出され、層別で内容に差はない。土器群はロクロ土師器を主体とし、須恵器が伴う組成となっている。

II、III 層の砂層は粗砂が堆積している層であり、遺跡の立地から旧梅田川の川砂であると考えられる。古代の遺物はいずれも砂層中より出土しており、旧梅田川の川底に混入したものと考えられる。

以下では、第1次・第2次調査の上杉六丁目遺跡の出土土器について概観したい。

(1) 出土遺物の組成

第1次・第2次調査の掲載・掲載外破片資料を合計した出土遺物の総数は 536 点であり、そのうち 81% がロクロ土師器であり、17% が須恵器である。第2次調査の出土遺物の全 281 点のうち、82% をロクロ土師器が占め、続いて 15% が須恵器、残りが瓦などその他の遺物となっている。第1次調査の出土遺物は全 255 点のうち、81% をロクロ土師器が占め、18% が須恵器、残りがその他の遺物となっている。第1次、第2次ともに、8割をロクロ土師器が占めるという組成は共通しており、須恵器の割合も類似している。

(2) 底部の切り離し技法と調整

底部の観察ができる資料については、I : 手持ちヘラケズリ（切り離し方法不明）、II a : 回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ、II b : 回転ヘラ切り無調整、III a : 回転糸切り→手持ちヘラケズリ、III b : 回転糸切り無調整、IV :

その他（不明）の6種が認められた。この内、ロクロ土師器ではI、II b、III a、III b、IVが認められ、須恵器ではI、II a、II b、III a、III b、IVが認められる。

図版掲載外の底部破片資料についても、切り離し技法と調整について観察した。1次調査破片資料では、ロクロ土師器坏20点において、I:10点、III a:4点、III b:4点、IV:2点という構成で、ロクロ土師器甕5点では、I:5点である。また、須恵器坏2点では、III b:2点である。2次調査破片資料では、ロクロ土師器坏24点のうち、I:14点、III a:6点、III b:2点、IV:2点であり、ロクロ土師器甕9点では、I:6点、III a:1点、III b:1点、IV:1点である。須恵器坏5点では、I:3点、II a:1点、III b:1点となっている。

（3）坏の口径底径比

1次・2次調査を合わせたロクロ土師器坏の口径底径比は、1:0.42～0.54の間で確認される。1次調査の平均が約1:0.46、2次調査の平均が約1:0.47であり、底部の切り離し技法に関わらず、同様の傾向を示している。また、1次・2次調査を合わせた須恵器坏の口径底径比は1:0.38～0.58の間で認められ、1次調査の平均が約1:0.49、2次調査の平均が約1:0.52である。その中でも、III b:回転糸切り無調整の須恵器坏では1:0.38～0.51に収まり、底径の比率がやや小さくなる一方で、II a、II bの回転ヘラ切りの須恵器坏は1:0.53～1:0.58であり、底径の比率が比較的大きくなっていることが窺える。

（4）外面・内面への調整

・外面への調整

ロクロ土師器坏の外面への調整は、ロクロナデの後、体部下端に手持ちヘラケズリの調整が施されるものが第1次・第2次調査とともに認められている。須恵器坏の外面には手持ちヘラケズリ等の調整は認められず、ロクロナデのみとなっているが、1点で墨書き確認される。ロクロ土師器坏は、基本的にロクロ目の間隔が広く、凹凸が明瞭でないものが多く、須恵器坏では比較的ロクロ目の間隔が狭く、ロクロ目の凹凸が明瞭になるものが多い。

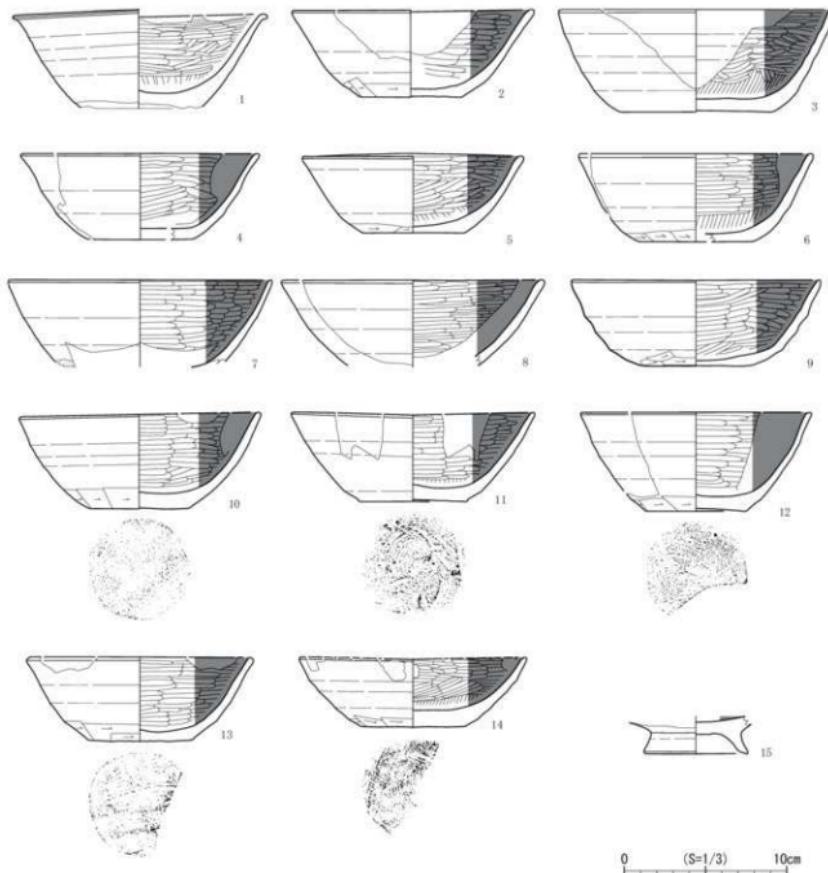
・内面への調整

ロクロ土師器坏は、内面にはヘラミガキの後に黒色処理を施すものが多くを占め、須恵器坏の内面はロクロナデによって調整されている。の中でも、内面のロクロ目の凹凸が不明瞭で、内面底部から体部へ滑らかに移行するよう上に調整が施されているもの認められた。こうした痕跡は、五本松窯跡の須恵器坏A III類で認められた「コテあて調整」に類似している。A III類は、「内面の底部から体部への立ち上がりは丸みを持ってスムーズに移行する」ものとされ、底部から体部の内面の調整と口縁部の調整は異なった方法がとられ、「外面のロクロ目の凹凸は著しいが、内面はロクロ目が不明瞭で、器面が滑らか」であり、内面に「コテあて調整」を施しているとされている「コテあて調整」の痕跡として、線状のヌタ痕が見られることがあるほか、調整が難な場合は、「①底部内面中央部に工具が当たらなかったために、前段階の指ナデロクロ整形痕を残すもの。②工具を最初に当たる部分、つまり、工具の當て目を残すもの。③工具を底部内面中央部に当てる時に、強く当てすぎたため、中央部に臍状の高まりを残すもの」が認められると指摘されている（仙台市教育委員会 1987）。こうした土器表面に残された痕跡については、製作実験を通じた形成過程の推定が行われており、コテによる痕跡の可能性が高い例についても確認されている。（館内ほか2019、館内2019）。

上杉六丁目遺跡出土のロクロ土師器坏・須恵器坏で認められた工具による痕跡については、③に相当する痕跡があるもの（第9図8）や、底部一體部の内面で工具が強く当たらなかったため前段階のロクロナデの凹凸が残っているもの（第6図4、5、7、9、第9図3）、工具を当てた調整面と非調整面との境界で窪みができるものの（第6図2）が確認された。

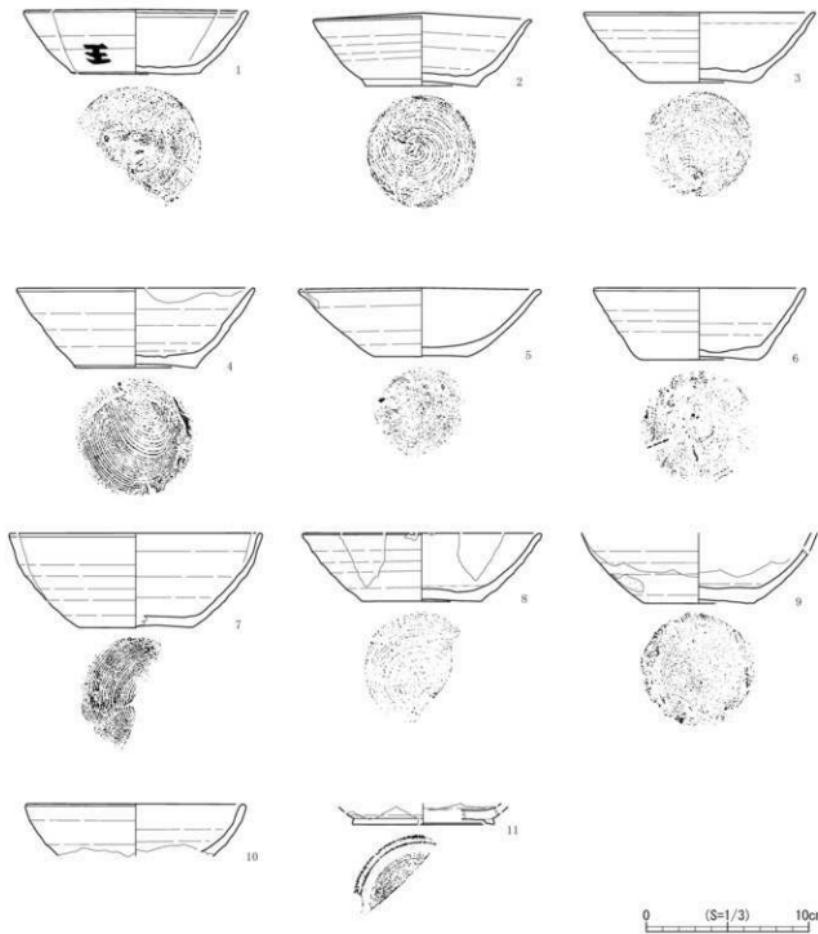
（5）上杉六丁目遺跡出土遺物の年代について

第1次調査資料と第2次調査資料を総合すると、①数量的にロクロ土師器を主体とし、一定数の須恵器が伴う。



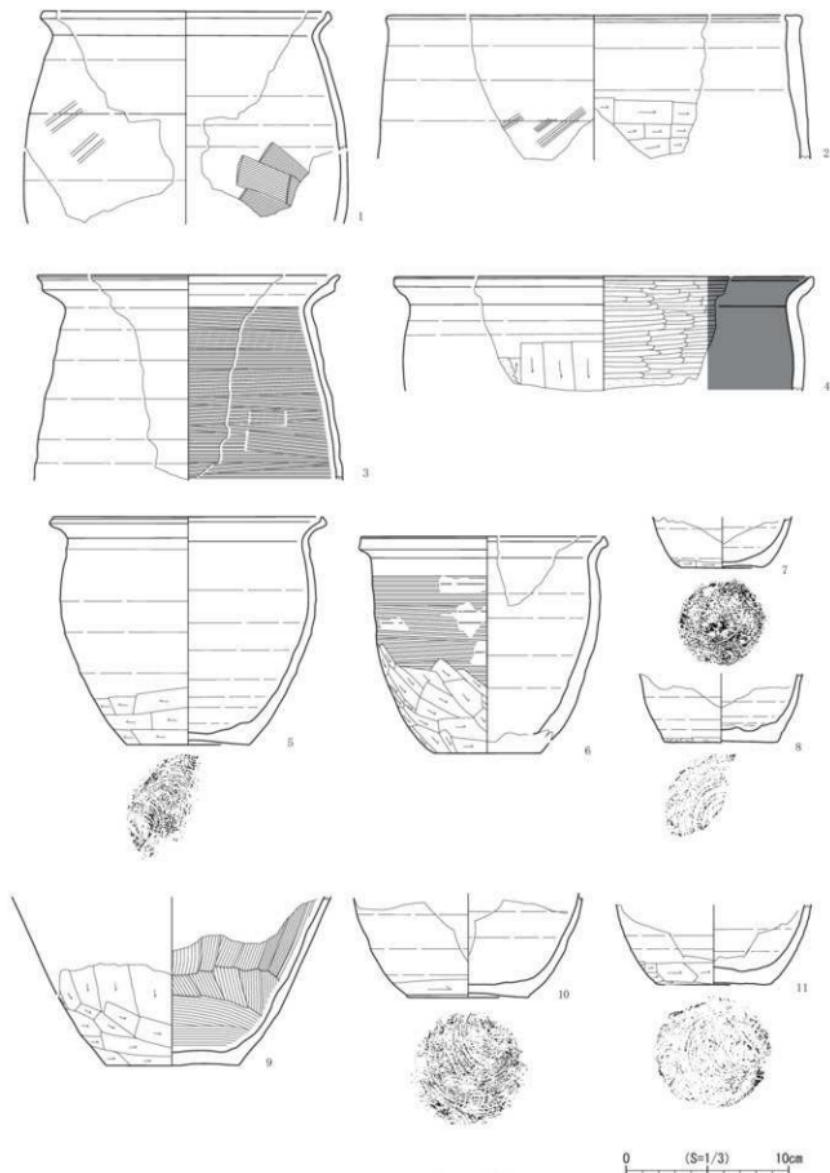
| 回復 番号 | 骨器 番号 | 種別 | 種類 | 法量 (cm) | | | 外観 | 内面 | 備考 | 写真 図版 |
|----------|----------|-----|----------|---------|-------|-------|-----------------------------|---|---------------------------|----------|
| | | | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | |
| 1 | D-1 | 土師器 | 高台付 盆 | 15.3 | 7.5 | (6.1) | ロクロナゲ | ハラミガキ・黒色熱焼 底/口:6.8 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.8 | 3-6 |
| 2 | D-5 | 土師器 | 坪 | 14.6 | 6.2 | 5.4 | ロヘ体:ロクロナゲ 体下端~底:子持ちハラケズリ | ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.4 | 3-7 |
| 3 | D-4 | 土師器 | 坪 | 16.6 | 9.2 | 6.3 | ロクロナゲ | ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.35 | 3-8 |
| 4 | D-12 | 土師器 | 坪 | (14.5) | 6.0 | 5.3 | ロクロナゲ 底:子持ちハラケズリ | ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.44 | 3-9 |
| 5 | D-2 | 土師器 | 坪 | 12.4 | 6.2 | 4.9 | ロヘ体:ロクロナゲ 体下端~底:子持ちハラケズリ | ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.4 | 3-10 |
| 6 | D-10 | 土師器 | 坪 | (14.2) | (7.0) | 5.4 | ロヘ体:ロクロナゲ 体下端~底:子持ちハラケズリ | ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.9 | 3-11 |
| 7 | D-12 | 土師器 | 坪 | (16.0) | - | (5.3) | ロクロナゲ | ハラミガキ・黑色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黑色熱焼 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.3 | 3-12 |
| 8 | D-14 | 土師器 | 坪 | (16.0) | - | (5.3) | ロクロナゲ | ハラミガキ・黑色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.3 | 3-13 |
| 9 | D-7 | 土師器 | 坪 | (15.2) | 6.8 | 5.3 | ロヘ体:ロクロナゲ 体下端~底:子持ちハラケズリ | ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.45 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.45 | 3-14 |
| 10 | D-3 | 土師器 | 坪 | 14.6 | 6.2 | 5.6 | ロヘ体:ロクロナゲ 体下端~底:子持ちハラケズリ | ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.4 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.4 | 3-15 |
| 11 | D-6 | 土師器 | 坪 | (14.8) | 6.6 | 5.5 | ロクロナゲ 回転:ハラケズリ 網目 | ハラミガキ・黒色熱焼 ハラミガキ・黒色熱焼 粘土焼 砂粒含む合む 底/口:6.45 | 粘土焼 砂粒含む合む 底/口:6.45 | 3-16 |
| 12 | D-9 | 土師器 | 坪 | (14.0) | 6.2 | 5.1 | ロヘ体:ロクロナゲ 体下端~底:子持ちハラケズリ | ハラミガキ・黒色熱焼 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.4 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.4 | 3-17 |
| 13 | D-8 | 土師器 | 坪 | (13.4) | (6.4) | 5.2 | ロヘ体:ロクロナゲ 体下端~底:子持ちハラケズリ | ハラミガキ・黒色熱焼 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.48 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.48 | 3-18 |
| 14 | D-11 | 土師器 | 坪 | (13.8) | (6.4) | 4.3 | ロヘ体:ロクロナゲ 体下端~底:子持ちハラケズリ | ハラミガキ・黒色熱焼 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.46 | 粘土焼 砂粒含む 底/口:6.46 | 3-19 |
| 15 | D-15 | 土師器 | 高台付 盆 | - | 6.2 | (2.3) | ロクロナゲ | ハラミガキ・黒色 熱焼 底台:ナゲ | 粘土焼 砂粒含む | 4-3 |

第8図 第1次調査出土遺物(1)

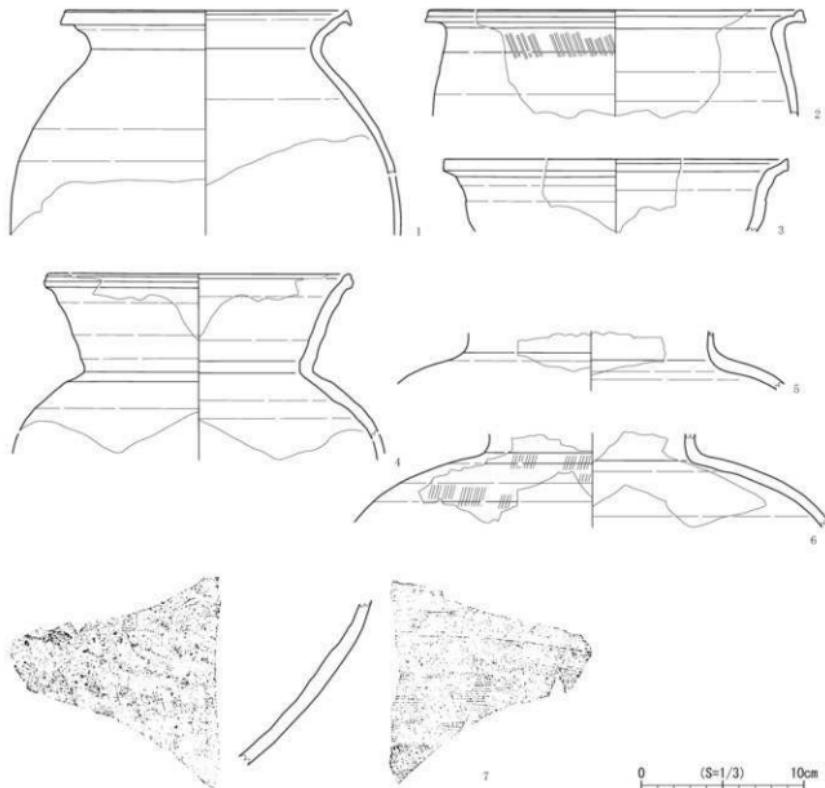


第9図 第1次調査出土遺物（2）

| 図版 番号 | 件名 番号 | 種類 | 断面 | 法量(cm) | | | 外観 | 内面 | 備考 | 写真 図版 |
|----------|----------|-----|----------|--------|-------|-------|-------------------------------|----------------|------------------------|----------|
| | | | | 口径 | 底径 | 厚さ | | | | |
| 1 | E-1 | 单柄器 | 坪 | (13.6) | (7.6) | 4.0 | ロクロナデ 既：回転ヘラ切り一手持ちハラズ リ「E」 | ロクロナデ | 粘土調査 砂粒含む 底／口 0.56 | 4-4 |
| 2 | E-2 | 单柄器 | 坪 | 13.2 | 6.8 | 4.3 | ロクロナデ 既：回転ホリ切り 無調査 | ロクロナデ | 粘土調査 砂粒含む 底／口 0.52 | 4-5 |
| 3 | E-3 | 单柄器 | 坪 | 14.2 | 6.4 | 4.3 | ロクロナデ 既：回転ホリ切り 無調査 | ロクロナデコテあと調査 | 粘土調査 砂粒含む 底／口 0.45 | 4-6 |
| 4 | E-4 | 单柄器 | 坪 | 14.6 | 7.4 | 4.9 | ロクロナデ 既：回転ホリ切り 無調査 | ロクロナデ | 粘土調査 砂粒含む 底／口 0.51 | 4-7 |
| 5 | E-5 | 单柄器 | 坪 | 14.7 | 5.6 | 4.2 | ロクロナデ 既：回転ホリ切り 無調査 | ロクロナデ(ロクロ日不明瞭) | 粘土調査 砂粒含む 底／口 0.38 | 4-8 |
| 6 | E-6 | 单柄器 | 坪 | (13.0) | 7.2 | 4.1 | ロクロナデ 既：回転ヘラ切り一手持ちハラズ リ | ロクロナデ | 粘土調査 砂粒含む 底／口 0.55 | 4-9 |
| 7 | E-7 | 单柄器 | 坪 | (15.0) | (7.0) | 5.8 | ロクロナデ 既：回転ホリ切り 無調査 | ロクロナデ | 粘土調査 砂粒含む 底／口 0.45 | 4-10 |
| 8 | E-8 | 单柄器 | 坪 | (14.7) | 7.2 | 4.2 | ロクロナデ 既：回転ホリ切り 無調査 | ロクロナデコテあと調査 | 粘土調査 砂粒含む 底／口 0.49 | 4-11 |
| 9 | E-9 | 单柄器 | 坪 | - | 6.8 | (4.3) | ロクロナデ 既：回転ホリ切り 無調査 | ロクロナデ | 粘土調査 砂粒含む | 4-12 |
| 10 | E-10 | 单柄器 | 坪 | (13.2) | - | (3.2) | ロクロナデ | ロクロナデ | 粘土調査 砂粒含む | 4-13 |
| 11 | E-12 | 单柄器 | 高台付 坪 | - | (8.7) | (1.3) | ロクロナデ 既：回転ヘラナデナデ | ロクロナデ | 粘土調査 砂粒含む 内面に付着物 あり | 4-14 |

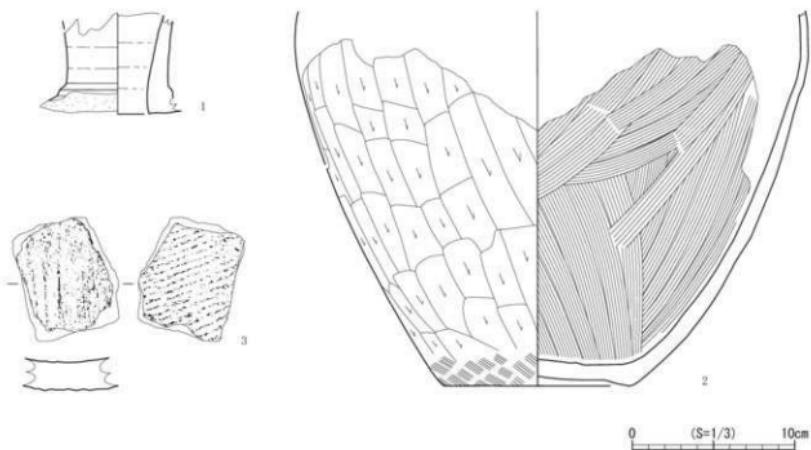


第10図 第1次調査出土遺物（3）



| 図版番号 | 登録番号 | 種類 | 基準 | 法量(cm) | | | 外面 | 内面 | 備考 | 写真図版 |
|-------|------|-----|----|--------|-------|--------|--|--------------------------|-----------------|------|
| | | | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | |
| 10-1 | D-19 | 土師器 | 瓶 | (17.0) | - | (12.0) | ロクロナデ 体:平行タグ目→ロクロナデ 口:ロクロナデ 体:平行タグ目→ロクロナデ →下部ラナデ | ロクロナデ 体:下半:ラナデ →下部ラナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 4-15 |
| 10-2 | D-22 | 土師器 | 瓶 | (25.0) | - | (8.0) | 平行タグ目→ロクロナデ | ロクロナデ 体:下半:ラナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 4-16 |
| 10-3 | D-20 | 土師器 | 瓶 | (18.4) | - | (12.0) | ロクロナデ | ロクロナデ 体:回転ハケ目 | 粘土無芯 砂粒含む | 4-17 |
| 10-4 | D-21 | 土師器 | 瓶 | (25.6) | - | (7.0) | ロクロナデ 体:ロクロナデ→ハケ目 | ハラミガニ・墨色修理 | 粘土無芯 砂粒含む | 4-18 |
| 10-5 | D-16 | 土師器 | 瓶 | (16.6) | (7.6) | 14.0 | ロクロナデ 体:回転ハケ目 | ロクロナデ | 粘土無芯 瓶/ロ. 10.46 | 4-19 |
| 10-6 | D-17 | 土師器 | 瓶 | 15.3 | - | 13.3 | ロ-体:ロクロナデ 小窓ハケ目 体下半:手持ち ラグゼリ | ロクロナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 4-20 |
| 10-7 | D-25 | 土師器 | 瓶 | - | 5.0 | (3.1) | ロクロナデ 体下端:手持ちハケ目 瓶:回転 切口 手持ちハケ目 | ロクロナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 4-21 |
| 10-8 | D-26 | 土師器 | 瓶 | - | (7.0) | (4.2) | ロクロナデ 体下端:手持ちハケ目 瓶:回転 切口 手持ち | ロクロナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 4-22 |
| 10-9 | D-18 | 土師器 | 瓶 | - | 8.2 | (10.3) | 体下半:瓶:ハケ目 | ハケ目→ラナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 5-1 |
| 10-10 | D-23 | 土師器 | 瓶 | - | 7.4 | (6.4) | ロクロナデ 体下端:回転ハケ目 瓶:回転切 口 手持ち | ロクロナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 5-2 |
| 10-11 | D-24 | 土師器 | 瓶 | - | 7.0 | (4.0) | ロクロナデ 体下端:手持ちハケ目 瓶:回転 切口 手持ち | ロクロナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 5-3 |
| 11-1 | E-11 | 瓦 | 瓦 | 17.4 | - | (12.8) | ロクロナデ | ロクロナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 5-4 |
| 11-2 | E-18 | 瓦 | 瓦 | (22.0) | - | (6.5) | 平行タグ目→ロクロナデ | ロクロナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 5-5 |
| 11-3 | E-14 | 瓦 | 瓦 | (21.2) | - | (4.2) | ロクロナデ | ロクロナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 5-6 |
| 11-4 | E-12 | 瓦 | 瓦 | (18.0) | - | (11.0) | ロクロナデ | ロクロナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 5-7 |
| 11-5 | E-15 | 瓦 | 瓦 | - | - | (3.7) | ロクロナデ | ロクロナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 5-8 |
| 11-6 | E-19 | 瓦 | 瓦 | - | - | (5.0) | 平行タグ目→ロクロナデ | ロクロナデ | 粘土無芯 砂粒含む | 5-9 |
| 11-7 | E-17 | 瓦 | 瓦 | - | - | (10.0) | 回転ハケ目-手持ちハケ目 | ハケ目-小窓ハケ目 | 粘土無芯 砂粒含む | 5-10 |

第11図 第1次調査出土遺物(4)



| 図版 番号 | 登録 番号 | 種類 | 器種 | 法量(cm) | | | 外側 | 内側 | 備考 | 写真 図版 |
|----------|----------|-----|----|--------|------|--------|----------------------|-------|-----------|----------|
| | | | | 口径 | 底径 | 厚さ | | | | |
| 1 | E-16 | 須恵器 | 壺 | - | - | (6.2) | ロクロナデ | ロクロナデ | 紹土師壺 細粒含む | 5-11 |
| 2 | E-12 | 須恵器 | 壺 | - | 11.6 | (23.0) | 体下端: ロクロタケモ 体: ヘラケズリ | ナデ | 紹土師壺 1/4残 | 5-12 |

| 図版 番号 | 登録 番号 | 種類 | 器種 | 法量(cm) | | | 備考 | 写真 図版 |
|----------|----------|----|----|--------|-------|-------|--------------------------------------|----------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| 3 | G-1 | 瓦 | 平瓦 | (2.1) | (5.8) | (1.8) | 内面: 縄織タケモ目 図: (瓦) →テグ→木田江施 調査団寺平瓦1枚類 | 5-13 |

第12図 第1次調査出土遺物(5)

②底部の切り離し技法に、回転ヘラ切りと回転糸切りがともに一定量認められる。③ロクロ土師器壺・須恵器壺ともに口径底径比が、概ね 1 : 0.4 ~ 0.6 の間で認められる。④外面の体部下端の調整にロクロナデ→手持ちヘラケズリとなっているものが一定数認められる。

これら①~④の特徴から、上杉六丁目遺跡の土器群の年代について推定すると、9世紀中葉を中心として、9世紀前葉~後葉までの土器が含まれているものと考えられる。遺物の組成と、出土遺物の特徴に類似した点が確認されることから、調査地点間で土器群の時期には大きな隔たりはないものと推測される。

発掘調査では遺構は検出されておらず、遺跡の性格の詳細については不明な点も残るが、出土遺物については、古代の遺物を中心としながらも、縄文土器が同じ砂層で出土していることなどから、複数の年代の遺物が混入していることが確認された。

引用・参考文献

仙台市教育委員会 1982 『仙台平野の遺跡群 I 昭和56年度発掘調査』仙台市文化財調査報告書第37集

仙台市教育委員会 1987 『五本松窯跡 都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第99集

館内魁生 2019 「9世紀後半の須恵器壺における技術変化-「コテ状工具」に関する実験的研究-」『宮城考古学』21 宮城県考古学会

館内魁生・今西純菜・早川文弥 2019 「土器表面の調整実験-「ナデ」調整による器面の変化と微細痕跡の観察-」東北大学大学院文化研究科考古学研究所『実験考古学ワークショップ』報告書



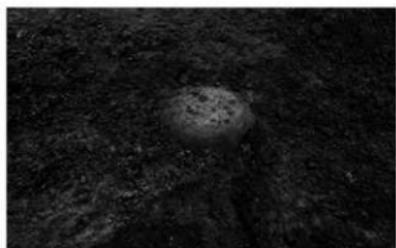
1. 完掘状況（西から）



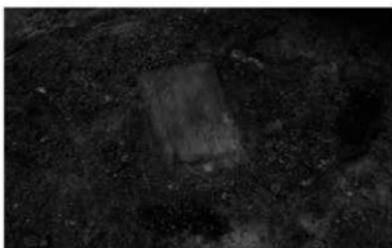
2. 南壁断面（北から）



3. II層中 遺物出土状況（1）（東から）



4. II層中 遺物出土状況（2）（西から）

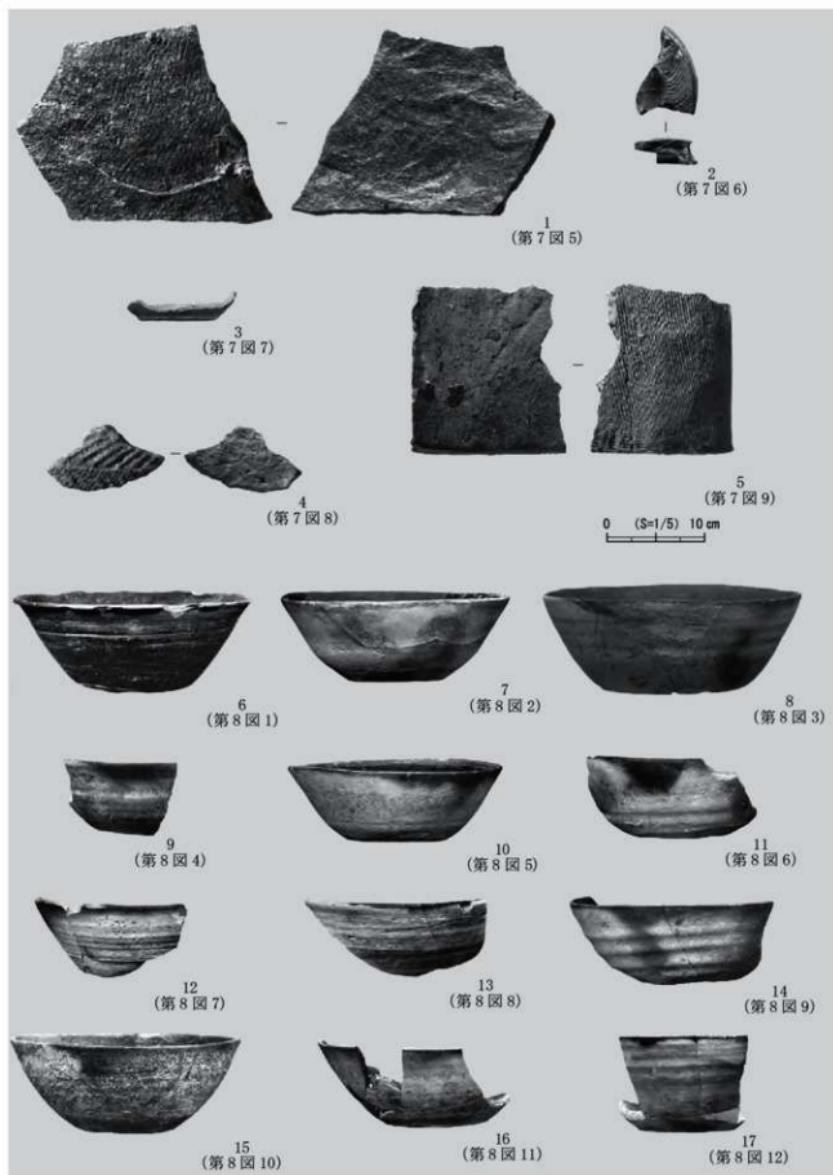


5. II層中 遺物出土状況（3）（北東から）

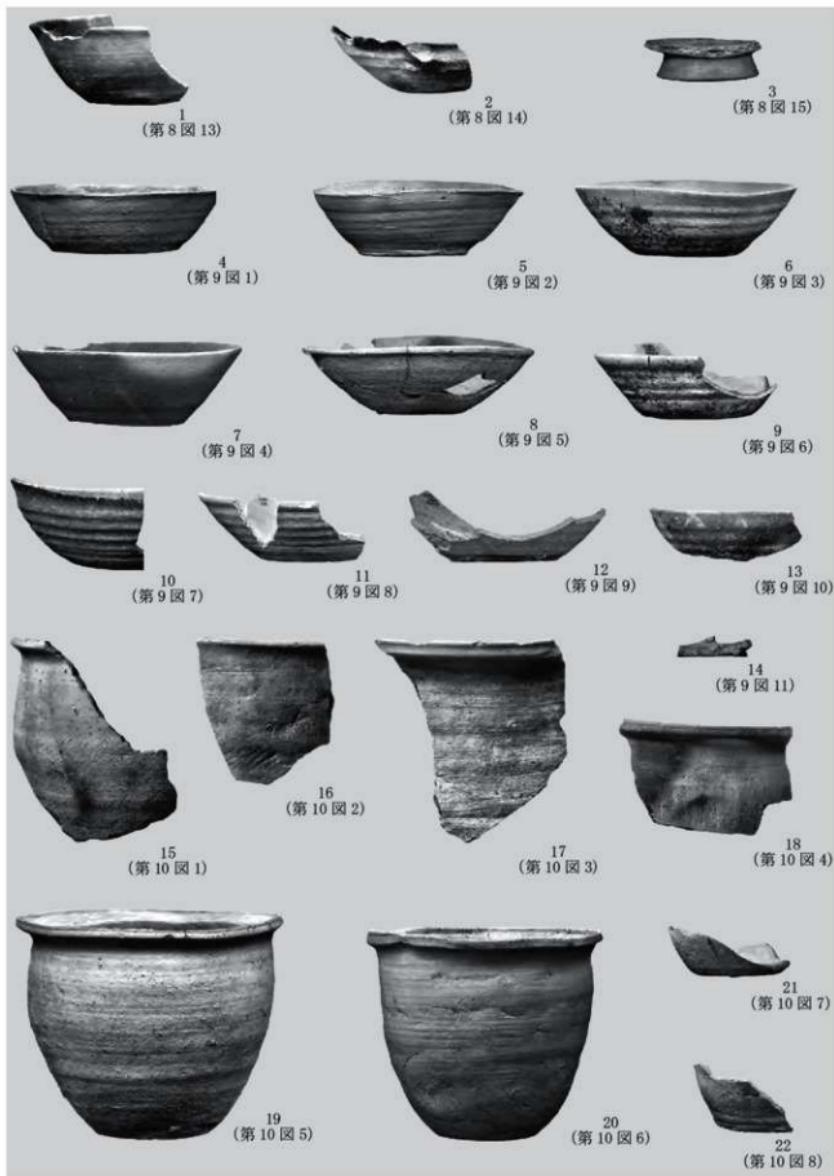
写真図版1 上杉六丁目遺跡第2次調査



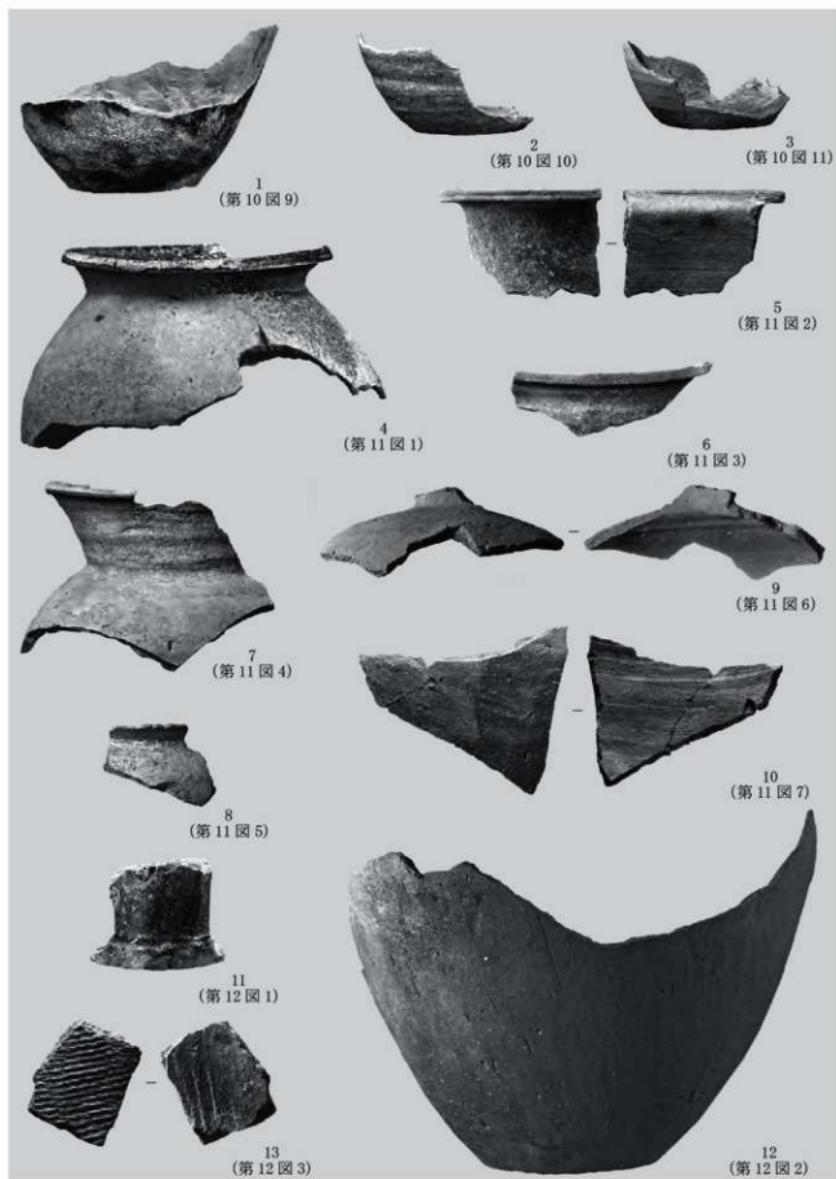
写真図版2 上杉六丁目遺跡第2次調査出土遺物(1)



写真図版3 上杉六丁目遺跡第2次調査出土遺物(2)・第1次調査出土遺物(1)



写真図版4 上杉六丁目遺跡第1次調査出土遺物(2)



写真図版5 上杉六丁目遺跡第1次調査出土遺物（3）

第3章 小鶴城跡の調査

第1節 遺跡の概要

小鶴城跡は、JR仙台駅の北東約4.3kmの宮城野区新田三丁目に所在する。七北田丘陵が平野部と接する地点にあたり、遺跡の東側に広がる後背湿地に突き出した舌状丘陵上に位置している。現況における標高は「殿上山」と呼ばれる丘陵頂部で約16mを測り、丘陵周辺の後背湿地との比高差は約11mである。

文献上では、享保13(1728)年の『仙台領古城書立の覚』(以下、古城書立)や『安永風土記御用書出』(以下、風土記)に記載がある。『古城書立』には「小鶴城、東西六十間、南北三十六間、右之城主名一切不相知候」とある。

本遺跡ではこれまでの発掘調査で、土壘状の高まりと溝状の地表顕在遺構のさらに西側で溝跡2条を確認し、三重に堀が巡る可能性が指摘されている。また第4次調査では、城館主体部とみられる丘陵西部で整地層や掘立柱建物跡等が確認され、丘陵裾部では大規模な溝跡が確認された。これらは小鶴城に関連すると考えられる。

第2節 第11次調査

1. 調査要項

| | |
|--------|----------------------|
| 遺跡名 | 小鶴城跡(宮城県遺跡登録番号01194) |
| 調査地点 | 仙台市宮城野区新田三丁目47-9の一部 |
| 調査期間 | 令和2年4月22日～4月23日 |
| 調査対象面積 | 54.9 m ² |
| 調査面積 | 12.0 m ² |
| 調査原因 | 個人住宅建築工事 |
| 調査主体 | 仙台市教育委員会 |
| 調査担当 | 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係 |
| 担当職員 | 主事 柳澤 楓 木村 恒 |

2. 調査に至る経過と調査方法

本件は、申請者より令和2年1月20日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和2年1月22日付H31教生文第101-425号で通知)に基づき実施した。

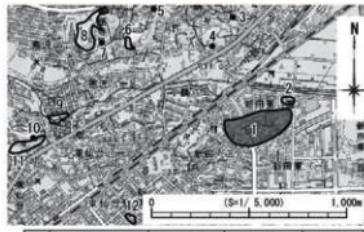
建築範囲内に南北3m、東西4mの規模で調査区を設定し、重機により盛土及び基本層I・II層を除去後、III層上面(GL-1.1～1.3m)で遺構確認作業を行った。III層上面で竪穴遺構1基を確認した。なお、調査区の壁面を検討した結果、竪穴遺構は基本層II層からの掘り込みであることが確認された。本来の遺構面であるII層上面の深度はGL-0.8～0.9mである。

調査では調査区平面図(1/50)、調査区断面図、遺構断面図(1/20)を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、埋め戻しは重機により行い調査を終了した。

3. 基本層

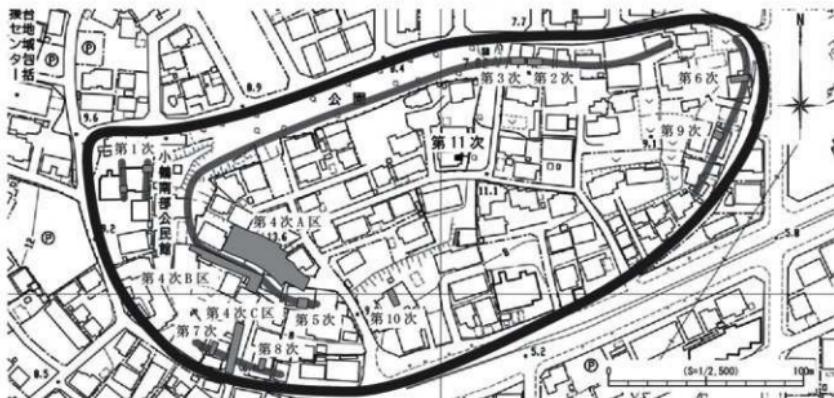
厚さ60～70cmの盛土の下に、基本層を3層、細別で4層確認した。

Ia層：10YR3/4暗褐色シルト。ややグライ化しており、炭化物を含む。耕作土と考えられる。層厚2～15cm。



第13図 小鶴城跡と周辺の遺跡

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 立地 | 時代 |
|----|----------|-----|------|-------|
| 1 | 小鶴城跡 | 城址跡 | 丘陵 | 中世 |
| 2 | 小鶴遺跡 | 散在地 | 自然環境 | 平安 |
| 3 | 五郎兵衛古墳 | 円墳 | 丘陵 | 古墳 |
| 4 | 小鶴一丁目古墳 | 復 | 丘陵 | 近世? |
| 5 | 北丘尼羅古墳 | 円墳 | 丘陵 | 古墳 |
| 6 | 地元寺東側六基群 | 横六基 | 丘陵斜面 | 古墳 |
| 7 | 無限蒙古の碑 | 板碑 | 丘陵 | 中世 |
| 8 | 地元寺横六基群 | 横六基 | 斜面 | 古墳 |
| 9 | 無限公園跡跡 | 古跡 | 丘陵斜面 | 古墳、奈良 |
| 10 | 室内古墳 | 円墳? | 丘陵頂部 | 古墳 |
| 11 | 大里寺遺跡 | 遺跡 | 丘陵斜面 | 古墳、奈良 |
| 12 | 新田北町遺跡 | 散在地 | 自然環境 | 平安 |



第14図 第11次調査区位置図

I b層 : 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。炭化物、酸化鉄を全体的に含む。層厚 20~30 cm。

II 層 : 10YR7/6 明黄褐色粘土質シルト。黒褐色粘土ブロックを少量含む。
調査区南西隅でのみ確認した。層厚約 35 cm。

III 層 : 10YR8/6 黄橙色粘土を主体とし、2.5Y8/1 灰白色粘土ブロックが混じる粘土質層。粘性、しまりが非常に強い。黒褐色粘土を筋状に含む。

4. 発見遺構と出土遺物

検出した遺構は、竪穴遺構1基である。遺物は縄文土器、土師器が出土した。

(1) 竪穴遺構

S11 竪穴遺構 (第16図)

【位置】調査区の南西側で遺構の南西辺を部分的に(約1m程度)確認した。調査区のほぼ全域が遺構内と推定される。

【規模・形態】部分的な検出のため、平面形や規模は不明である。

【堆積土】4層確認した。1~3層は基本層II層ブロックを斑状に含む。

【壁面】ほぼ垂直に立ちあがる。壁高は最大で40cmを測る。

【床面】概ね平坦である。基本層III層を床面とする。

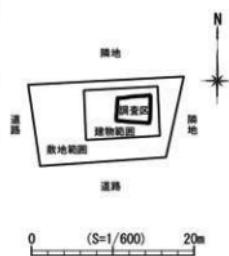
【柱穴】床面でピット1基(S11-P1)を確認した。平面形は円形で直径50cm程度である。径15cm程の柱痕跡を確認した。断面形はU字形を呈し、深さは54cm程度である。規模と位置関係から、主柱穴の可能性がある。

【周溝】南西部で確認した。幅10cm、深さ5cm程度と規模は小さい。

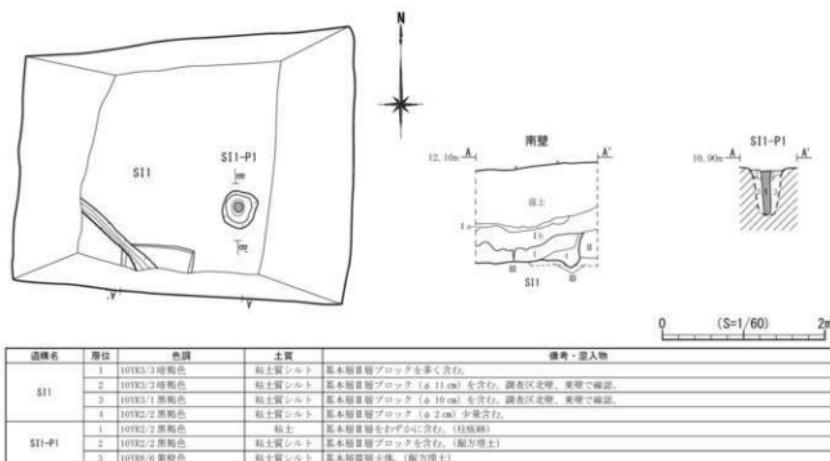
【出土遺物】堆積土中より縄文土器2点、土師器の壊や高壺の壊部破片が25点出土した。第17図2は、ピット(S11-P1)の掘方理士から出土した壊で、全体的に磨滅しているが、特徴から8世紀前半頃と考えられる。第17図1は、周溝からの出土である。磨滅しており調整は不明瞭である。

5.まとめ

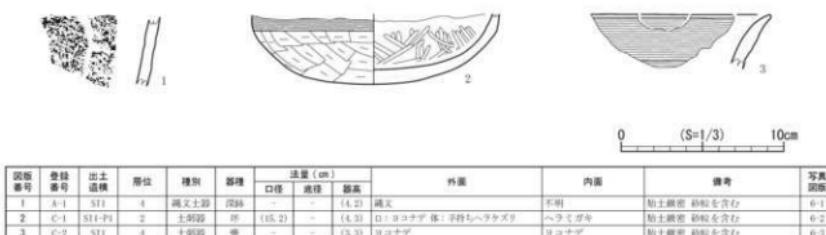
調査地点は、小鶴城跡のほぼ中央部、丘陵東側に位置している。これまでの調査では丘陵斜面直下で溝跡やピッ



第15図 第11次調査区配置図



第16図 第11次調査区平面・断面図



第17図 SI1 壇穴遺構出土遺物

ト等多くの遺構が確認されており、とくに溝跡は小鶴城に伴う痕跡と考えられ、丘陵を巡るようにして確認されている。

基本層Ⅲ層上面で竪穴遺構1基を確認し、遺物は、調文土器、土師器が出土した。調査で確認したSI1竪穴遺構は、調査区のほぼ全域に広がる。壁面がほぼ垂直に立ち上ること、底面がほぼ平坦であることや、小規模であるが周溝状の落ち込み、柱痕跡を伴うピットが確認されたことから、竪穴住居跡の可能性はあるが、カマドや水跡等の施設は確認できなかったことから、竪穴遺構とした。遺構の年代は、柱穴の掘り方埋め土から出土した遺物の年代から8世紀以降と考えられる。

調査地周辺（丘陵東側）では、これまでの調査で遺構・遺物は確認されておらず、また小鶴城跡全体の調査においても、竪穴遺構が確認されたのは初めてである。小鶴城が造営される以前の様相についても今後の調査成果を待ち、検討していく必要がある。

参考文献

仙台市教育委員会 2011 『法領塚古墳他』仙台市文化財調査報告書第393集



1. 遺構検出状況（東から）



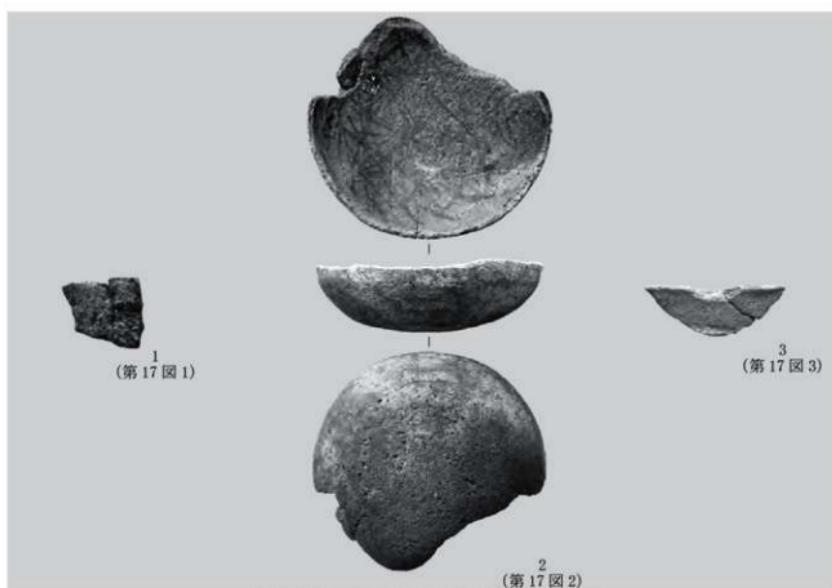
2. SI1-P1 断面（西から）



3. 西壁断面（SI1 堆積土）



4. 遺構完掘状況（東から）



1
(第17図1)

2
(第17図2)

3
(第17図3)

写真図版6 小鶴城跡第11次調査・出土遺物

第4章 南小泉遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

南小泉遺跡は、仙台市の東部、JR仙台駅の東南約3.5kmの地点に位置する。広瀬川と名取川の合流地点より北へ約3kmの場所にあり、「宮城野海岸平野」と呼ばれる冲積平野の自然堤防上に立地し、標高は7~14mである。

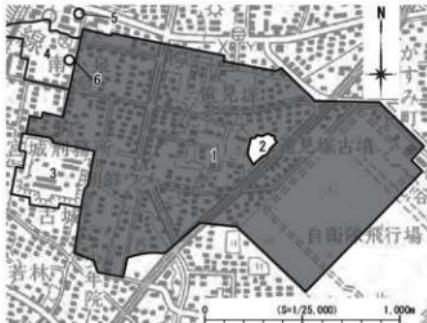
本遺跡は昭和14年の霞ヶ丘飛行場拡張工事の際に弥生時代と古墳時代の遺構と遺物が発見されて以来、これまでに86次に及ぶ本発掘調査が行われ、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。特に弥生・古墳時代の集落跡として知られ、東北地方南部の古墳時代中期の土器類「南小泉式」の標準遺跡である。

また、遺跡内には遠見塚古墳があり、西部では若林城跡、北西部では養種園遺跡と接し、周辺には法領塚古墳、蛇塚古墳、猫塚古墳などが分布する。

第2節 第87次調査

1. 調査要項

| | |
|--------|-----------------------------|
| 遺跡名 | 南小泉遺跡(01021) |
| 調査地点 | 仙台市若林区南小泉三丁目 |
| 15番104 | |
| 調査期間 | 令和元年5月29日~6月3日 |
| 調査対象面積 | 12.70 m ² |
| 調査面積 | 約18.0 m ² |
| 調査原因 | 個人住宅建築工事 |
| 調査主体 | 仙台市教育委員会 |
| 調査担当 | 仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係 |
| 担当職員 | 主事 妹尾一樹 相川ひとみ 文化財教諭 元山祐一 |



| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 立地 | 時代 |
|----|-------|-------------|------|----------|
| 1 | 南小泉遺跡 | 墓葬跡、簡便跡 | 自然堤防 | 弥生～近世 |
| 2 | 遠見塚古墳 | 前方後円墳 | 自然堤防 | 古墳 |
| 3 | 若林城跡 | 円墳、集落跡、簡便跡 | 自然堤防 | 古墳～近世 |
| 4 | 養種園遺跡 | 墓葬跡、簡便跡、包含地 | 自然堤防 | 縄文、古墳～近世 |
| 5 | 法領塚古墳 | 円墳 | 自然堤防 | 古墳 |
| 6 | 蛇塚古墳 | 円墳 | 自然堤防 | 古墳 |

第18図 南小泉遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

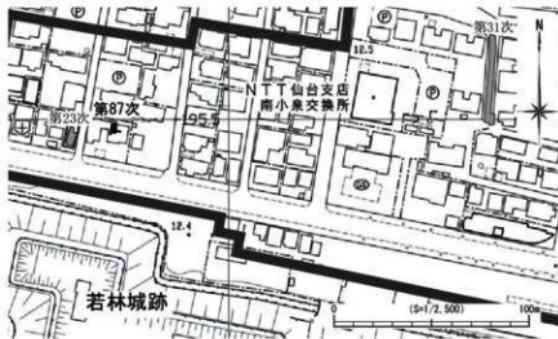
本件は、令和元年5月14日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和元年5月16日付H31教生文第101-55号で通知)に基づき実施した。

調査では対象地内に東西3m、南北5mの調査区を設定し、重機によりⅠ層を除去後、Ⅱ層上面(GL-0.4m)で遺構検出作業を行い、竪穴遺構1基、溝跡2条を検出した。また、埋戻し前に竪穴遺構の規模確認のため、調査区南側を東西1m、南北1m、東側に東西2m、南北1mの規模で拡張した。

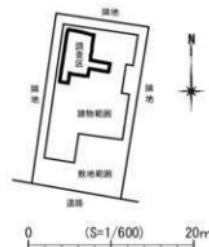
必要に応じて、調査区平面図(1/40)および西壁・北壁断面図(1/20)を作製し、写真記録はデジタルカメラで撮影した。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

基本層を2層確認した。遺構検出面であるⅡ層上面までの深さは0.4mである。



第19図 第87次調査区位置図



第20図 第87次調査区配置図

I 層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。小礫を含む。宅地造成前の旧表土で耕作土と考えられる。層厚 50 cm程度。

II 層：10YR5/6 黄褐色シルト。小礫と砂を含み、酸化鉄を部分的に含む。今回の遺構検出面である。

4. 発見遺構と出土遺物

検出遺構は、堅穴遺構 1基、溝跡 2条である。遺物は、基本層および各遺構から土師器と須恵器が出土した。

(1) 堅穴遺構

SI1 堅穴遺構（第21図）

調査区の北半部で検出した。カマドや炉跡等の施設が確認できなかったため堅穴遺構とした。

【重複】SD1、SD2 溝跡より新しい。また、一部擾乱により削平される。

【規模・形状】南半部分の検出で、規模は南辺 4.8m 以上、南北 3.4m 以上である。平面形は方形を呈すると考えられる。

【方向】南辺を基準とした方向は E - 18° - S である。

【堆積土】3層確認した。2層が周溝堆積土、3層が掘り方埋め土である。

【壁面】ほぼ垂直に立ち上がる。遺構検出面から床面までの深さは南壁で 19cm である。

【床面】掘り方埋め土である3層上面を床面とする。概ね平坦であるが南から北に向かって 3 ~ 6 cm 傾斜する。

【主柱穴】確認できなかった。

【周溝】南壁で認められた。規模は幅 23 ~ 39cm、深さ 12cm で断面形は U字形を呈する。

【カマド】確認できなかった。

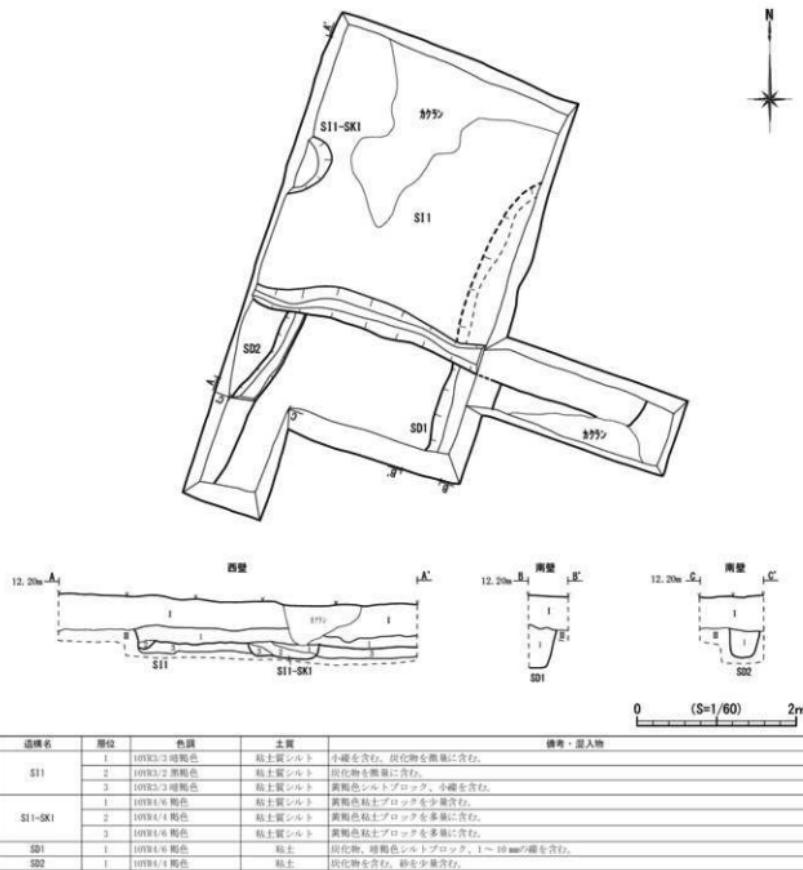
【その他施設】床面で土坑 1基（SI1-SK1）を検出した。平面形は円形を呈すると考えられ、規模は南北長 82 cm、東西長 35cm 以上、深さ 19cm である。断面形は皿形を呈し、堆積土は 3 層確認された。

【出土遺物】遺物は 1 ~ 3 層から土師器片 42 点、須恵器片 1 点が出土した。掘り方埋め土からは「関東系土器」とされる土師器の壊が出土した（第22図2）。全体の器形は不明であるが、口縁部は屈曲を持ち、直立する。

(2) 溝跡

SD1 溝跡（第21図）

調査区南西部で確認した。南北方向に延びる溝跡で、SI1 堅穴遺構よりも古い。規模は検出長 380cm、検出幅約



第21図 第87次調査区平面・断面図

80cm、深さは50cmである。断面形状は不明であるが、底面は平坦で、西壁はやや急に立ち上がる。堆積土は単層である。遺物は土師器片が1点出土したが図化できるものはない。

SD2溝跡（第21図）

調査区南東部で確認した。南北方向に延びる溝跡で、S11 竪穴遺構よりも古い。規模は検出長128cm、検出幅36cm、深さは35cmである。断面形状はU字形を呈し、堆積土は単層である。遺物は土師器片が9点出土し、このうち「関東系土器」とされる坏が図化できた（第22図1）。全体の器形は不明であるが、口縁部は屈曲を持ち内傾する。

（3）遺構出土遺物

基本層I～II層からは土師器片が26点、須恵器片が1点出土し、このうち土師器の壺1点が図化できた（第22



図22-87 第87次調査出土遺物

図3)。I層から出土しているが、出土位置はSD2溝跡の直上であるため、堆積土中に含まれていたものが現代の耕作によって巻き上げられた可能性もある。

5.まとめ

今回の調査地点は、南小泉遺跡の西部に位置し、古墳時代の可能性のある竪穴遺構1基と溝跡2条を検出した。また、遺物は基本層や遺構から非クロロ土師器や須恵器が出土している。

各遺構の時期は次のように考えられる。SI1竪穴遺構の掘り方埋め土から出土した非クロロ土師器の壺(第22回2)は「関東系土器」とされ、第22次調査の壺II B類に相当する。南小泉遺跡や郡山遺跡、長町駅東遺跡のこれまでの調査から住社式から栗間式にかけての土器と共伴関係が認められ、南小泉遺跡では第22次調査でII期とされた、住社式の新しい段階と共伴していることから、SI1竪穴遺構は住社式から栗間式の時期に収まる可能性がある。SD2溝跡からも第22次調査の壺II A類に相当する「関東系土器」が出土している(第22回1)。SI1竪穴遺構と同様の時期に属する可能性があるが、重複関係からSI1竪穴遺構より古い。SD1溝跡の時期についてはSI1竪穴遺構より古く、土師器が出土していることから少なくとも古墳時代に属すると推定される。また、時期判断のできる遺物として、基本層から出土した土師器の甕(第22回3)は頭部と胴部の境界に不明瞭な段が認められ、体部最終調整はハケメ調整でないことから、住社式の新段階に比定される。

本調査区の東方約300mで行われた第22次調査(仙台市教育委員会1994)や、東方約150mで行われた第31次調査(仙台市教育委員会1998)では古墳時代後期(住社式から栗間式)の竪穴住居跡と共に、「関東系土器」の一定量の出土が認められた。特に第22次調査では、幅7mの大溝によって区画される居住域が西方に広がることが確認されており、南小泉遺跡西部において「関東系土器」が出土する集落跡が広がっていることが指摘されている。本調査区からも遺物の出土量はわずかであるが、住社式新段階の土師器が確認され、「関東系土器」が出土することから同様の性格を持った地点であった可能性がある。

参考文献

仙台市教育委員会 1994 『南小泉遺跡 第22次・23次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第192集
仙台市教育委員会 1998 『南小泉遺跡 第30・31次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第226集



1. SI1 壴穴遺構完掘状況（北東から）



2. 拡張時 SI1 壴穴遺構検出状況（西から）



3. SI1 壴穴遺構土層断面（南東から）



4. 遺構完掘状況（北から）



写真図版7 南小泉遺跡第87次調査・出土遺物

第3節 第88次調査

1. 調査要項

遺跡名 南小泉遺跡(01021)
 調査地點 仙台市若林区遠見塚1丁目131番10、18
 調査期間 令和元年12月2日～12月3日
 調査対象面積 49.68 m²
 調査面積 10.0 m²
 調査原因 個人住宅建築工事
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
 担当職員 主事 須貝慎吾 佐藤恒介

2. 調査に至る経過と調査方法

本件は、申請者より令和元年9月27日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和元年10月1日付H31教生文第101-264号で通知)に基づき実施した。

調査区は建築予定範囲内の柱状改良部を避け東西2m、南北5mの規模で設定した。重機により盛土およびI～II層を除去し、III層上面(GL-0.6m)で遺構検出作業を行い、土坑2基、性格不明遺構1基を確認した。

調査では必要に応じて調査区平面図(1/20)、調査区東壁断面図(1/20)を作製し、記録写真はデジタルカメラにて撮影した。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

厚さ約40～50cmの盛土の下で、基本層を4層確認した。遺構検出面であるIII層上面までの深さは約0.6mである。

- I 層：10YR5/6 黄褐色シルト。現代の耕作土で、層厚約20cm。
- II 層：10YR4/4 褐色シルト。III層ブロック及び炭化物を僅かに含む。西壁でのみ確認される。層厚8～12cm。
- III 層：10YR5/8 黒褐色砂質シルト。層厚6cm以上。今回の遺構検出面である。
- IV 層：10YR5/6 黄褐色シルト。層厚50cm以上。



第23図 第88次調査区位置図



第24図 第88次調査区配置図

4. 発見遺構と出土遺物

遺構は、土坑2基、性格不明遺構1基を検出し、遺物は、基本層および各遺構から土師器と須恵器が出土した。

(1) 土坑

SK1 土坑（第25図）

中央部で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は南北長80cm、東西長65cm、遺構検出面からの深さは29cmである。堆積土は2層に分層され、1層は焼土が混じる。遺物は1層から土師器片23点、土錐が3点出土し、非ロクロ土師器の壺（第26図1）と甕（第26図3）土錐（第26図4～6）が図化できた。土錐の全体形については不明であるが、管状を呈し、復元径3.9～4.2cm、孔径1.0～1.2cmと近似し、同規格のものと推定される。

SK2 土坑（第25図）

北西部で部分的に検出され、西側は調査区外へ延びる。確認した規模は南北長75cm、東西長30cmで、遺構検出面からの深さは25cmである。断面形はU字形を呈し、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

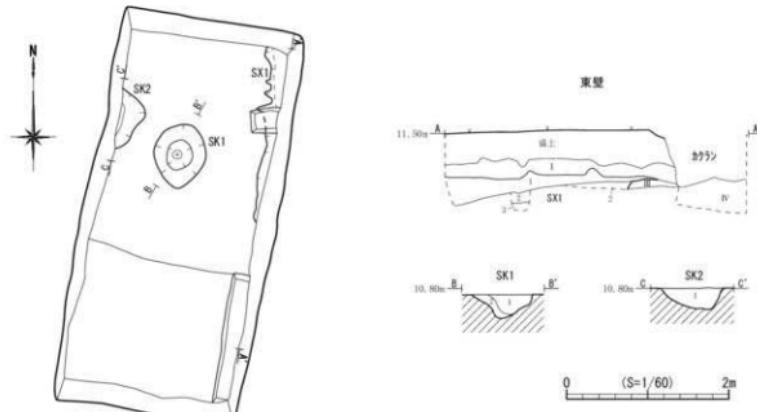
(2) 性格不明遺構

SX1 性格不明遺構（第25図）

調査区東側で検出された。掘削深度の関係で、最大で地表面から1mまでの掘削に留めており、形状や規模等の詳細は不明である。確認した規模は南北長2.1m、東西長25cm、遺構検出面からの深さは45cmである。堆積土は3層に分層される。遺物は土師器片3点と須恵器片1点が出土したが、図化できるものはない。

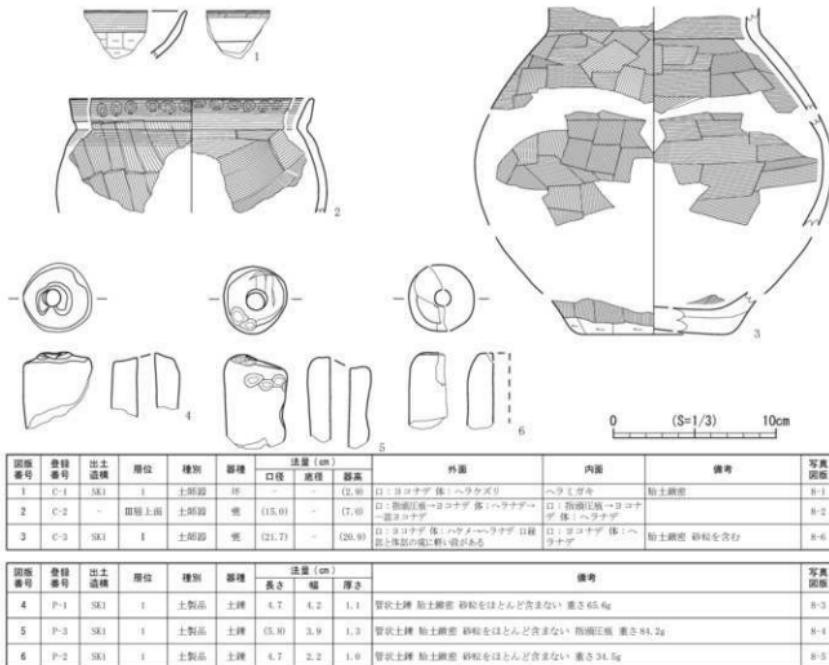
(3) その他の出土遺物

基本層Ⅲ層から非ロクロ土師器が5点出土し、甕1点が図化できた（第26図2）。球胴形の器形で、体部には



| 遺構名 | 部位 | 色調 | 土質 | 備考・遺物 |
|-----|----|--------------|-------|----------------------|
| SK1 | 1 | 10IVg/2 黒褐色 | シルト | 地土、明黄褐色粘土をブロック状に含む。 |
| | 2 | 10IVg/4 暗褐色 | シルト | 1層由来の土が混ざる。 |
| SK2 | 1 | 10IVc/4 暗褐色 | シルト | 灰褐色（約5mm～30mm）を含む。 |
| | 2 | 10IVc/3 暗褐色 | シルト | 細化鉄を微弱に含む。 |
| SX1 | 1 | 10IVg/8 明黃褐色 | 砂質シルト | 細化鉄を含む燒土層、下面に細化鉄が集積。 |
| | 2 | 10IVg/3 暗褐色 | 砂質シルト | 細化鉄を微弱に含む。 |
| | 3 | 10IVg/3 暗褐色 | 砂質シルト | 細化鉄を微弱に含む。 |

第25図 第88次調査区平面・断面図



第26図 第88次調査出土遺物

ヘラナデが施され、口縁端部は内外面に指頭压痕が認められる。

5.まとめ

今回の調査地点は南小泉遺跡の中央からやや南西側に位置する。今回の調査では土坑2基、性格不明遺構1基が確認され、遺物は土師器、須恵器、土鍾が出土した。

SX1 土坑からは南小泉式と考えられる土師器が出土し、3点の管状土鍾については同規格のものと考えられる。SK2 土坑、SX1 性格不明遺構については時期決定資料がないため、年代は不明である。また、基本層からの出土遺物は小片が多く明確な時期については検討できないが、ロクロの使用が明確に認められる土師器は出土していない。

周辺の調査では、古墳時代の堅穴住居跡が確認されており、調査区の南東部では特に古墳時代中期（南小泉式期）を中心とした集落の広がりが確認されている（第14・25・26次調査など）。今回の調査では古墳時代中期と考えられる土坑が確認されており、これら集落と関わりがあった場であったと考えられる。

参考文献

- 仙台市教育委員会 1987 『南小泉遺跡 第14次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第109集
- 仙台市教育委員会 1995 『南小泉遺跡 第25次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第196集
- 仙台市教育委員会 1998 『南小泉遺跡 第26次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第225集



1. 遺構検出状況（南から）



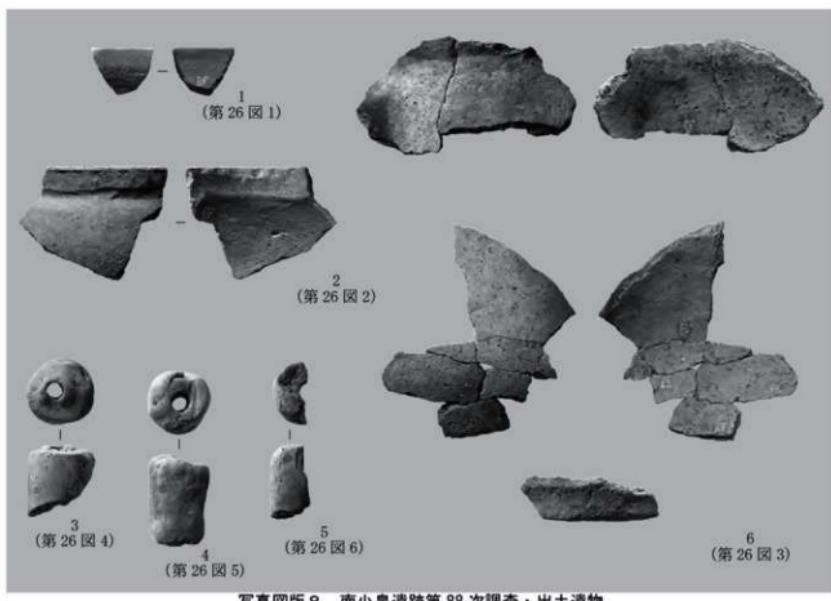
2. SK1 土坑断面（東から）



3. SK2 土坑断面（東から）



4. 調査区北壁断面（南から）



写真図版8 南小泉遺跡第88次調査・出土遺物

第4節 第89次調査

1. 調査要項

| | |
|--------|-------------------------|
| 遺跡名 | 南小泉遺跡（宮城県遺跡登録番号 01021） |
| 調査地点 | 仙台市若林区遠見塚2丁目336番6号 |
| 調査期間 | 令和2年5月11日～5月14日 |
| 調査対象面積 | 76.1 m ² |
| 調査面積 | 約12.0 m ² |
| 調査原因 | 個人住宅建築工事 |
| 調査主体 | 仙台市教育委員会 |
| 調査担当 | 仙台市教育生涯学習部文化財課調査調整係 |
| 担当職員 | 主査 近藤勇亮 主任 小浦真彦 主事 柳澤 楓 |

2. 調査に至る経過と調査方法

本件は、令和2年3月31日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和2年4月3日付R2教生文第101-5号で通知）に基づき実施した。

調査では対象地内に南北4m、東西3mの調査区を設定し、重機により盛土及び基本層Ⅰ層を除去し、Ⅱ層上面(GL-0.9m)で遺構検出作業を行い、溝跡2条、土坑1基、ピット4基を確認した。遺物は土器類、土製品が出土した。

調査では、調査区平面図(S=1/20)および調査区・遺構の断面図を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラにて行った。埋戻しは重機により行い調査を終了した。

3. 基本層序

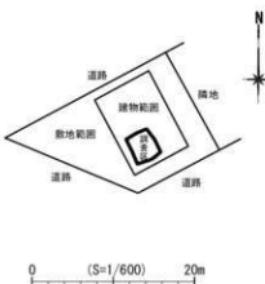
厚さ約70cmの盛土の下に基本層を3層、細別で4層確認した。遺構検出面であるⅡ層上面までの深さは約0.9mである。

I a層：10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。盛土層との境に酸化鉄が帶状に集積する。しまりが弱く盛土以前の耕作土と考えられる。ややグライ化している。層厚10～20cm。

I b層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。酸化鉄粒、マンガンを全体に含む。I a層との境に酸化鉄が帶状に集積する。層厚2～16cm。



第27図 第89次調査区位置図



第28図 第89次調査区配置図

- II 層：10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。10YR3/4 暗褐色粘土ブロックを含む。今回の遺構検出面である。層厚約40cm。
- III 層：10YR6/4 にぶい黄橙色粘土質シルト。10YR3/4 暗褐色粘土ブロックを含む。

4. 発見遺構と出土遺物

検出遺構は、溝跡2条、土坑1基、ピット4基である。遺物は、基本層及び各遺構から土師器、土製品が出土した。

(1) 溝跡

SD1溝跡（第29図）

調査区北部で確認した東西方向の溝跡で、両端は調査区外に延びる。調査区のほぼ半分を占める規模で、検出長約3.3m、検出幅約1.6mである。断面形は皿形を呈し、深さ約0.5mである。堆積土を10層確認した。

遺物は1～4層を中心に土師器片が341点出土した。器種は壺、高壺、甕、小型壺がある。小型壺（第30図1）は丸底を呈し、胴部中央が張り出す。高壺（第30図2）は脚部のみの出土である。中空で、しづりが確認でき、中央にかけて膨らみをもつと考えられる。

SD2溝跡（第29図）

調査区の南隅で確認した、東西方向の溝跡である。SK2土坑、P3より古い。検出長約1.0m、幅35cm以上である。断面形はU字形を呈し、深さ約30cmである。堆積土は単層である。遺物は土師器の壺や甕が5点出土したが、図化はできなかった。

(2) 土坑

SK1土坑（第29図）

調査区の南側で確認し、調査区外へさらに広がる。SD1溝跡よりも新しい。平面形は不整円形を呈すると推定され、検出規模は南北長約1.0m、東西長約1.4mである。断面形は皿形を呈し、深さ約20cmである。堆積土を2層確認した。遺物は1層から土師器の壺や甕が32点、土製品が3点出土したが図化はできなかった。

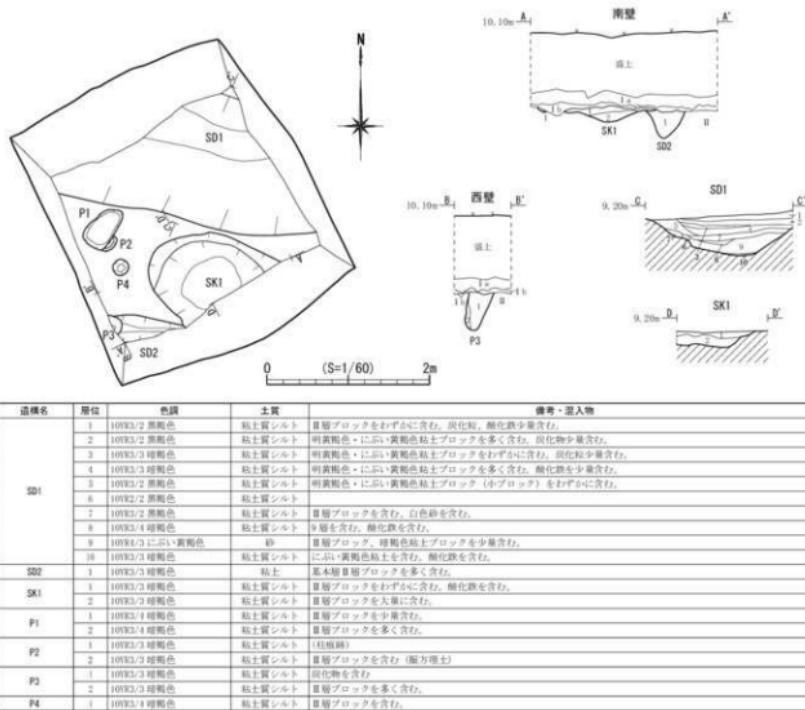
(3) ピット（第29図）

4基確認した。そのうちP2は柱痕跡を伴う。P1と重複しており、それより古い。平面形は円形で、規模は直径約25cm、深さ約28cmである。柱痕跡は径8cmである。遺物は、P2・3・4から土師器の壺や甕の破片が14点出土したが、図化はできなかった。

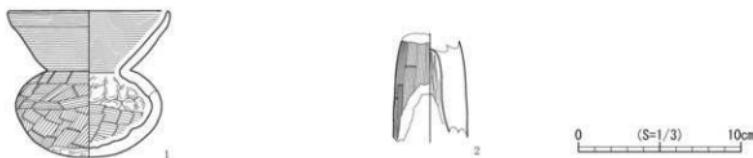
5.まとめ

調査地点は、南小泉遺跡の北東部、遠見塚古墳からは北に約280mの場所に位置する。調査では基本層II層上面で溝跡2条、土坑1基、ピット4基を確認した。調査地点より南西側で行われた第81次調査では南小泉式から引田式にかけての竪穴住居跡が確認されており、遠見塚古墳北側での集落の存在が示されている。

今回の調査では、住居跡は確認されなかつたが、溝跡、土坑、ピットといった集落の存在を示す遺構が確認された。出土遺物は、図化できたものが2点のみであるが、南小泉式期の特徴を有することから、およそ5世紀の前葉から中葉頃のものであると考えられる。第81次調査と合わせ、周辺での集落の広がりを確認することができた。



第29図 第89次調査区平面・断面図



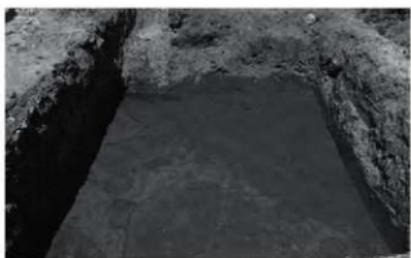
| 遺物 番号 | 登録 番号 | 出土 遺構 | 位置 | 種類 | 基盤 | 注意(cm) | | | 外観 | 内観 | 備考 | 写真 回数 |
|----------|----------|----------|----|-----|-----|--------|----|-------|--------------------------|-------------------------------------|------------|----------|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | |
| 1 | C-1 | SD1 | - | 上部器 | 小型器 | 10.0 | - | 9.9 | 口:ヨコナラ、体:ヘラナラ 底:ヘラカズリ | 口:ヨコナラ、体上半:指オサエ 体下半:ヘラナラ シボリ目 | 粘土細密 砂粒を含む | 9-1 |
| 2 | C-2 | SD1 | - | 上部器 | 高床 | - | - | (6.7) | ヘラナラ | | 粘土細密 砂粒を含む | 9-2 |

第30図 SD1溝跡出土遺物

参考文献

仙台市教育委員会 2004 『鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査報告書』 280集

仙台市教育委員会 2017 『脊形遺跡他』仙台市文化財調査報告書』 458集



1. 遺構検出状況（南から）



2. SD1 溝跡断面（南東から）



3. SK1 土坑断面（東から）



4. 完掘状況（南から）



1
(第30図1)



2
(第30図2)

写真図版9 南小泉遺跡第89次調査・出土遺物

第5章 中在家南遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

中在家南遺跡は仙台市若林区荒井字中在家、字札屋敷等に所在する。JR仙台駅の南東約5kmに位置し、標高約5mの自然堤防上に立地する縄文時代から近世の複合遺跡である。遺跡では、弥生時代中期の土坑墓や土器棺墓、河川跡、古墳時代前期の方形周溝墓、古墳時代や平安時代の堅穴住居跡が確認されている。特に河川跡からは、弥生時代中期の土器、石器、木製品、骨角器等が多量に出土している。木製品を中心とした出土遺物は、弥生時代の生活を知るうえできわめて重要な考古資料であり、平成15年に仙台市有形文化財に指定されている。



第2節 第11次調査

1. 調査要項

| | |
|--------|------------------------|
| 遺跡名 | 中在家南遺跡（宮城県遺跡登録番号01427） |
| 調査地点 | 仙台市若林区荒井1丁目1番15の一部 |
| 調査期間 | 令和2年5月22日～年5月26日 |
| 調査対象面積 | 53.82 m ² |
| 調査面積 | 約12.0 m ² |
| 調査原因 | 個人住宅建築工事 |
| 調査主体 | 仙台市教育委員会 |
| 調査担当 | 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係 |
| 担当職員 | 主任 小浦真彦 主事 柳澤楓 |

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 立地 | 時代 |
|----|----------|-------------|--------------|-------|
| 1 | 中在家南遺跡 | 基、河川跡、本田跡 | 自然堆積 後背湿地 | 縄文～近世 |
| 2 | 中在家遺跡 | 包含地 | 自然堆積 | 平安 |
| 3 | 仙台市荒井条里跡 | 条里跡 | 自然堆積 | 平安 |
| 4 | 高麗敷遺跡 | 敷布地 | 自然堆積 | 古墳、古代 |
| 5 | 長吉地掘跡 | 城郭跡 | 自然堆積 | 中世 |
| 6 | 押口遺跡 | 河川跡、本田跡、包含地 | 自然堆積 後背湿地 | 弥生～近世 |
| 7 | 荒井市遺跡 | 本田跡 | 後背湿地 | 弥生 |

第31図 中在家南遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

本件は、令和2年4月10日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和2年4月14日付R2教生文第101-24号で通知）に基づき実施した。

調査では対象地内に東西3m、南北4mの調査区を設定し、重機により盛土を除去した段階(GL-1.3m程度)で、安全面を考慮し1.5m×1.5mの規模に調査区を縮小した。基本層I層を除去後、GL-1.5～1.6mで河川堆積土を確認した。北壁にサブトレンチを設定して堆積状況の確認を行ったところ、河川堆積土が全体的に東に向かって傾斜していることを確認した。また、調査区の四方に排水用を兼ねて側溝を掘り、下層を観察したところ、全地点で基本層I層の下で河川堆積土が認められたことから、調査区全体が河川跡であることが確認された。

調査では、調査区平面図(1/20)および調査区北壁土層断面図(1/20)を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、河川堆積土1m³を場外搬出し、河川内は再生砕石で、残りは発生土で埋め戻しを行い調査を終了した。

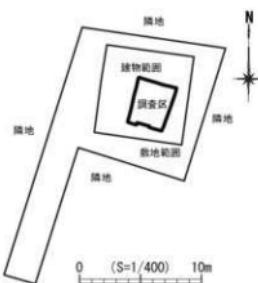
3. 基本層序

厚さ約1.3mの盛土の下に基本層を2層、細別で3層確認した。

I a層：10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。盛土以前の耕作土で、ややグライ化している。炭化粒を少量含む。層厚



第32図 第11次調査区位置図



第33図 第11次調査区配置図

6～16 cm。

I b層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。グライ化した黒褐色粘土ブロック、炭化物を少量含み、河川堆積土1層が少量混じる。網状の暗渠排水管が確認され、現代の水田耕作土層であると考えられる。層厚4～15 cm。

II 層：2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト。黒褐色粘土ブロックを少量含む。植物遺存体をわずかに含む。ややグライ化している。

4. 発見構造と出土遺物

河川跡を検出した。遺物は出土していない。

(1) 河川跡

SR1 河川跡（第34図）

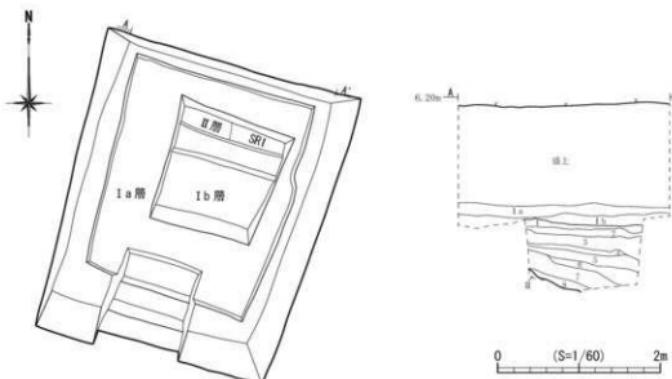
調査区全体がSR1 河川跡で、調査区外に広がる。これまでの調査で確認されている河川跡の延長部分と考えられ、堆積土が西から東へかけて緩やかに傾斜していることを確認した。安全面を考慮して検出面から深さ0.8mの掘削に留めており、完掘はしていない。堆積土は8層に分層され、全体的に黒褐色粘土を主体としており、植物遺存体を多く含む。遺物は出土していない。

5.まとめ

今回の調査地点は仙台東郊条里跡の北側、中在家南遺跡の西側に位置する。今回の調査では過年度の調査で確認されている弥生時代から古代にかけての河川跡の延長部分の検出が想定されていた。調査では想定通り調査区全体でSR1 河川跡を確認した。河川堆積土が東へ傾斜しながら堆積している状況が確認できたことと、GL-2.2mの深さで河底の基本層II層を確認できることから、河川の西岸近くの箇所と考えられる。

参考文献

仙台市教育委員会 2018 『仙台平野の遺跡群 28』 仙台市埋蔵文化財調査報告書 469集



| 遺構名 | 位置 | 色調 | 土質 | 備考・混入物 |
|-----|----|------------|----|--------------------------|
| SR1 | 1 | HWR2/1 黒褐色 | 粘土 | 基本層 I b 層 ブロックを含む。 |
| | 2 | HWR2/3 黒褐色 | 粘土 | 下部に植物遺存体を含む。酸化鉄含む。 |
| | 3 | HWR2/1 黒褐色 | 粘土 | 植物遺存体を含む。酸化鉄含む。 |
| | 4 | HWR2/1 黒褐色 | 粘土 | 植物遺存体を含む。黑色粘土を帯びる。 |
| | 5 | HWR2/2 黒褐色 | 粘土 | 植物遺存体を含む。酸化鉄を含む。 |
| | 6 | HWR2/1 黒褐色 | 粘土 | 植物遺存体を多く含む。 |
| | 7 | HWR2/7 黒褐色 | 粘土 | 植物遺存体を多く含む。 |
| | 8 | HWR3/1 黒褐色 | 粘土 | 基本層 II 層が感じられる。植物遺存体を含む。 |

第34図 第11次調査区平面・断面図



1. 調査区全景（南から）



2. SR1 河川跡 堆積土（北壁）

写真図版 10 中在家南遺跡第 11 次調査

第6章 北目城跡の調査

第1節 遺跡の概要

北目城跡は仙台駅の南東約1.5kmの名取川と広瀬川に囲まれた郡山低地の東部にあたり、標高9~12mの自然堤防上に立地する平城跡である。

宝永年間(1670年代)に記された「仙台領古城書上」によると、北目城は天正年間までは栗野氏の居城となっている。また、関ヶ原の戦いの際は伊達政宗が入城し、仙台城に移るまでの間居住していたことが知られている。第1次調査では、底に障壁がある大規模な「障子堀」を伴う堀跡をはじめとした遺構が検出され、16世紀後半から19世紀にかけての陶磁器、刀、木製品などの遺物が出土した。これまでの8次にわたる調査で、縄文時代から近世にかけての遺構、遺物が確認されている。

第2節 第9次調査

1. 調査要項

遺跡名 北目城跡(01029)

調査地点 仙台市太白区郡山字北目宅地32番4

調査期間 令和2年1月27日

調査対象面積 57.13 m²

調査面積 約6 m²

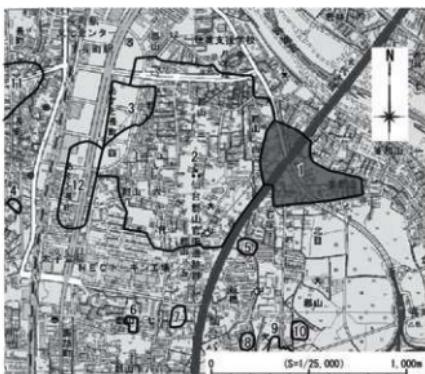
調査原因 個人住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係

担当職員 主事 佐藤恒介 木村恒

第35図 北目城跡と周辺の遺跡



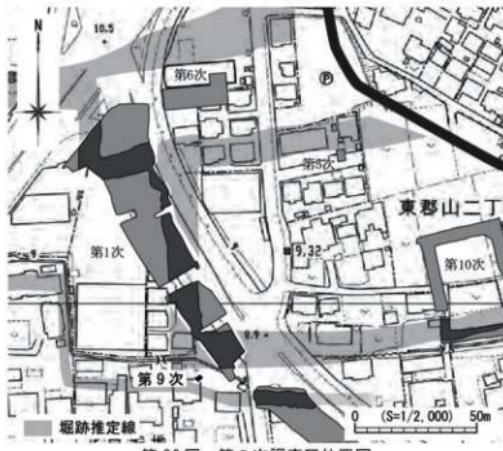
| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 立地 | 時代 |
|----|---------|-------------|-------|--------|
| 1 | 北目城跡 | 城郭跡、空堀跡、水田跡 | 自然堤防内 | 縄文～近世 |
| 2 | 西山遺跡 | 官道跡、空堀跡 | 自然堤防内 | 縄文～中世 |
| 3 | 西台北遺跡 | 便道跡、空堀跡 | 自然堤防内 | 縄文～中世 |
| 4 | 尾町六丁目遺跡 | 集落跡 | 自然堤防内 | 奈良、平安 |
| 5 | 久米遺跡 | 散在地 | 自然堤防内 | 古墳、古代 |
| 6 | 的羅跡 | 集落跡 | 自然堤防内 | 奈良、平安 |
| 7 | 龍ノ上遺跡 | 集落跡 | 自然堤防内 | 後奈良時代 |
| 8 | 久ノ上Ⅰ遺跡 | 水田跡 | 後奈良時代 | 古墳～中世 |
| 9 | 久ノ上Ⅱ遺跡 | 集落跡 | 自然堤防内 | 古墳～平安 |
| 10 | 新沢遺跡 | 集落跡、台地 | 自然堤防内 | 古墳～平安 |
| 11 | 前沢遺跡 | 集落跡、水田跡、敷石地 | 後奈良時代 | 前石器～近世 |
| 12 | 長町東遺跡 | 集落跡 | 自然堤防内 | 古墳～近世 |

2. 調査に至る経過と調査方法

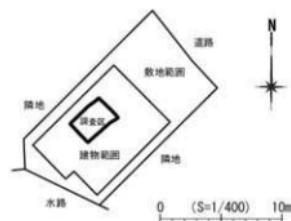
本件は、申請者より令和2年1月17日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(令和2年1月20日付H31教生文第101-419号で通知)に基づき実施した。

調査区は建築範囲内に6 m²(2m×3m)の規模で設定した。重機により盛土およびI層を除去し、II層上面(GL-1.0m程度)で遺構検出作業を行った。その結果、調査区北西壁から南東壁にかけて溝跡1条が検出され、北西壁で断面の観察を行った。

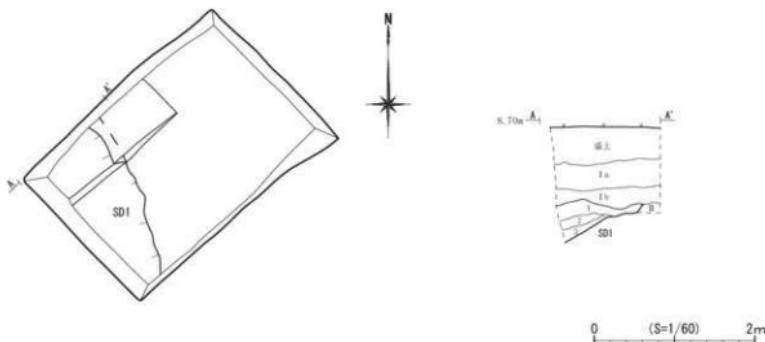
今回の調査では調査区平面図(1/20)、調査区北西壁の断面図(1/20)を作成し、記録写真はデジタルカメラにて撮影した。記録作業終了後、重機により複数回の締めを行なながら埋戻しを行い、調査を終了した。



第36図 第9次調査区位置図



第37図 第9次調査区配置図



第38図 第9次調査区平面・断面図

3. 基本層序

厚さ約40 cmの盛土の下に、基本層を2層、細別で3層確認した。遺構確認を行ったII層上面までの深さはGL-1.0 m程度である。

I a層：7.5YR3/4暗褐色シルトを主体とし、黄褐色粘土質シルトを含む旧耕作土。層厚30 cm程度。

I b層：7.5YR4/6褐色シルトを主体とし、マンガン粒（φ 1 cm程度）を含む旧耕作土。II層上面を耕作によつて乱しており、II層ブロックを含む。層厚10～25 cm。

II 層：10YR6/8明黄褐色粘土質シルトを主体とし植物遺体を含む。上面が遺構検出面である。層厚10 cm以上。

4. 発見遺構と出土遺物

検出遺構は、溝跡1条である。遺物は出土していない。

(1) 溝跡

SD1溝跡（第38図）

調査区北西壁から南西壁にかけて確認された北西—南東方向の溝跡である。検出長は約2.1m、検出幅約0.9m、検出深度はII層上面から50cm程度であり、底面は未検出である。堆積土は3層に分層され、いずれも自然堆積層であると考えられる。なお、遺物は出土していない。

5.まとめ

今回の調査地点は北目城跡の南端に位置し、北目城跡第1次調査II-D区の南側に位置する。調査の結果、GL-1.0mで北西—南東方向の溝跡が確認された。遺物も出土しておらず、部分的な検出のため全体の規模は不明である。当初、第1次調査で確認されたSD1堀跡の延長が検出される想定したが、想定していた堀の延長と若干のずれがあり、第9次調査SD1溝跡は延びている方向が異なることからも、別の溝跡と考えられる。

参考文献

仙台市教育委員会 1995 『北目城跡』仙台市文化財調査報告書第197集

仙台市教育委員会 2017 『脊形遺跡他』仙台市文化財調査報告書第458集



1. SD1溝跡検出状況（東から）



2. SD1溝跡検出状況（北東から）



3. SD1溝跡土層断面（南東から）



4. 北西壁断面（南東から）

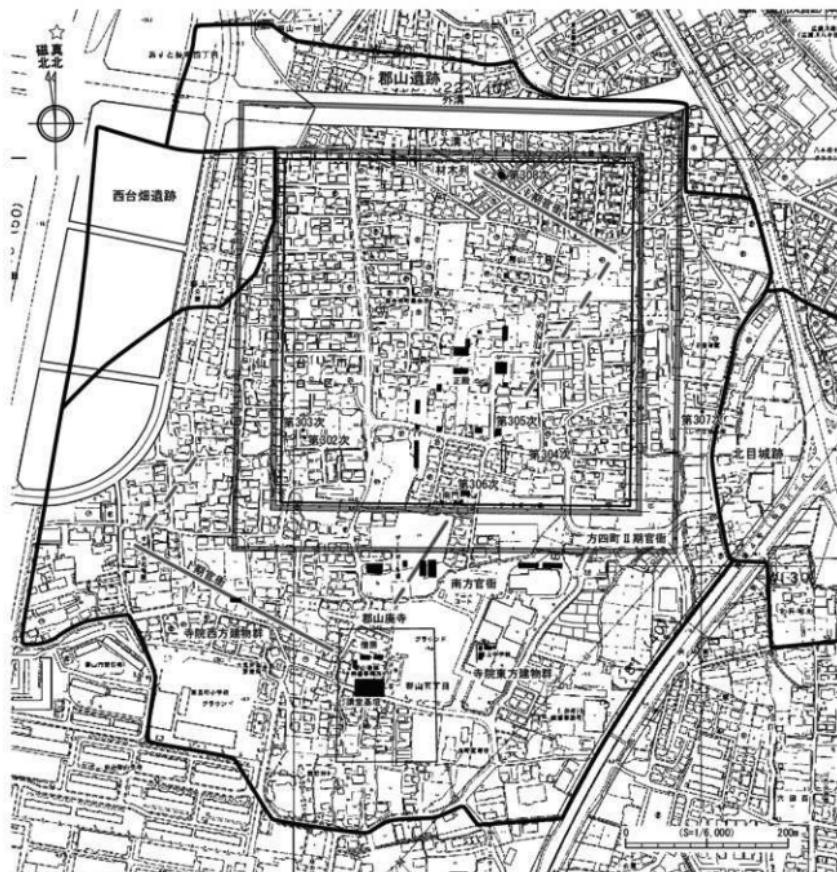
写真図版 11 北目城跡第9次調査

第7章 郡山遺跡の調査

令和元年度末から令和2年度に実施した発掘調査は、第39図の通りである。なお、個人住宅建築に伴う発掘調査の結果および抄録は、仙台市文化財調査報告書第492集『郡山遺跡41』に所収している。

表3 令和2年度 郡山遺跡発掘調査一覧（一部令和元年度実施分を含む）

| 調査次数 | 調査地区 | 調査面積 | 調査期間 | 調査原因 | 対応 |
|-------|-------------|---------------------|-------------------|--------|----------|
| 第302次 | Ⅱ 郡山西西部 | 16 m ² | 令和2年12月10日～12月23日 | 個人住宅増築 | 郡山遺跡は小調査 |
| 第303次 | Ⅱ 郡山西西部 | 14 m ² | 令和2年12月10日～12月23日 | 個人住宅増築 | 郡山遺跡は小調査 |
| 第304次 | Ⅱ 郡山西南部 | 13.2 m ² | 令和2年7月20日～7月21日 | 個人住宅増築 | 郡山遺跡は小調査 |
| 第305次 | Ⅱ 郡山市中町沿南東側 | 30.3 m ² | 令和2年8月24日～9月28日 | 範囲確認 | 郡山遺跡は小調査 |
| 第306次 | Ⅱ 郡山市南門北側 | 60 m ² | 令和2年8月24日～9月28日 | 範囲確認 | 郡山遺跡は小調査 |
| 第307次 | 郡山遺跡東端部 | 9.9 m ² | 令和2年10月21日～10月28日 | 個人住宅増築 | 郡山遺跡は小調査 |
| 第308次 | Ⅱ 郡山市東東部 | 22.6 m ² | 令和2年11月4日～12月11日 | 個人住宅増築 | 郡山遺跡は小調査 |



第39図 郡山遺跡調査区位置図

第8章 総括

令和2年度に国庫補助対象事業で実施した調査件数は、令和2年12月末で26件（13遺跡）である。本書では令和元年度を含め、令和2年12月までに行った調査の中で、別に報告される郡山遺跡を除き7件（5遺跡）の調査について報告した。その成果については以下のようにまとめられる。

1. 上杉六丁目遺跡（第2次調査）

第2次調査では、ロクロ土師器を中心として、須恵器などの古代の遺物が出土した。遺物は河川堆積と考えられる砂層中から出土しており、遺跡の立地からも旧梅田川の川底に混入したものと考えられる。昭和55年に実施された第1次調査でも、砂層中から古代の遺物が出土したことが記録されており、同様の河川堆積層から出土したものと考えられる。

遺物の年代については、9世紀中葉を中心とした、9世紀代と考えられる。過去の調査事例も少なく、遺構・遺物がどのように分布しているのかは不明な点が多く、今後の資料の蓄積が待たれる。

2. 小鶴城跡（第11次調査）

堅穴遺構1基を検出した。遺物は、縄文土器、土師器が出土している。調査区のほぼ全域が遺構であり、平面形や規模は不明であるが、周溝状の落ち込みや柱痕跡を伴うピットが確認された。遺物は遺構内堆積土とピットから出土し、特に柱痕跡を伴うピットの掘り方埋め土から出土した土師器の壊はほぼ完形で、8世紀前半頃のものであると考えられる。遺構の年代は、柱穴の掘り方埋め土から出土した遺物の年代から8世紀以降と考えられる。

小鶴城跡全体の調査において、堅穴遺構が確認されたのは初めてである。小鶴城が造営される以前の様相についても今後の調査成果の蓄積を待ち、検討していく必要がある。

3. 南小泉遺跡（第87・88・89次調査）

3カ所の調査地点で古墳時代・古代の遺構・遺物が確認された。検出遺構は堅穴遺構、溝跡、土坑、ピット、性格不明遺構であり、土師器、須恵器、土製品が出土している。

第87次調査では堅穴遺構1基、溝跡2基が検出されており、遺構の時期については限定できないが、SI1堅穴遺構は住社式から栗圓式の時期に収まる可能性がある。また、「関東系土器」が出土したが、南小泉遺跡の南西部は別地点に比べ、「関東系土器」が多く出土する傾向があり、第87次調査区も同様の性格を持った地点であると考えられる。

第88次調査では土坑2基、性格不明遺構1基が検出されており、SK1の焼土や粘土ブロックを含む堆積土から南小泉式期と考えられる土器と管状土錐が3点出土した。調査区周辺では、古墳時代中期（南小泉式期）の集落が確認されており、第88次調査区も集落と何らかの関わりを持った場であると考えられる。

第89次調査では溝跡2条、土坑1基、ピット4基が検出された。SD1溝跡からは、小型壺や高杯の脚部が出土している。特徴から南小泉式期と考えられる。近隣の過年度の調査でも南小泉式期と考えられる堅穴住居跡が検出されており、集落の広がりが確認できた。

4. 中在家南遺跡（第11次調査）

河川跡を検出した。この河川跡は、過年度の調査で確認されている弥生時代から古代にかけての河川跡と同一の河川であり、河川堆積土が東へ傾斜しながら堆積している状況が確認できたことから、調査地は河川の西岸近くと考えられる。なお、遺物は出土していない。

5. 北目城跡（第9次）

溝跡1条を検出した。部分的な検出のため全体の規模は不明である。遺物も出土しなかったため、溝跡の詳細な時期については判断できなかった。第1次調査の堀跡の延長が検出される可能性を想定したが、第9次調査では方向が異なる溝跡が検出された。遺跡南側で溝跡がどのように巡るのかについては、今後の調査成果を含めて検討していく必要がある。

報告書抄録

| ふりがな | せんだいへいやのいせきぐん | | | | | | | |
|---------------------------------------|--|----------------|-----------|-------------|--------------|-----------------------|---------------------|--------------------|
| 書名 | 仙台平野の遺跡群 31 令和2年度 個人住宅他国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | 仙台市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 仙台市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第491集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 妹尾一樹 柳澤 楓 木村 恒 斎野裕彦 | | | | | | | |
| 編集機関 | 仙台市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒 980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目 5-12 仙台市役所 上杉分庁舎 10階 TEL : 022-214-8894 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2021年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町 村 | 遺跡 番号 | 北緯 | 東経 | 発掘期間 | 発掘面積 | 発掘原因 |
| かみひざくらちやうじゆ 上杉六丁目 遺跡 (第2次) | 宮城県仙台市青葉区 かみひざくらちやうじゆ 上杉六丁目 | 04101 | 01324 | 38° 16' 44" | 140° 52' 33" | 20200302～ 20200303 | 12.0 m ² | 記録保存調査 (個人住宅建築) |
| ごくちゅうじゅうめい 小鶴城跡 (第11次) | 宮城県仙台市 ごくちゅうじゅうめい 新田三丁目 | 04102 | 01194 | 38° 16' 48" | 140° 55' 50" | 20200422～ 20200423 | 12.0 m ² | 記録保存調査 (個人住宅建築) |
| かみこひざくらちやうじゆ 南 小泉遺跡 (第87次) | 宮城県仙台市若林区 かみこひざくらちやうじゆ 南小泉三丁目 | 04103 | 01021 | 38° 14' 19" | 140° 54' 06" | 20190529～ 20190603 | 18.0 m ² | 記録保存調査 (個人住宅建築) |
| かみこひざくらちやうじゆ 南 小泉遺跡 (第88次) | 宮城県仙台市若林区 かみこひざくらちやうじゆ 遠見塚一丁目 | 04103 | 01021 | 38° 14' 18" | 140° 54' 28" | 20191202～ 20191203 | 10.0 m ² | 記録保存調査 (個人住宅建築) |
| かみこひざくらちやうじゆ 南 小泉遺跡 (第89次) | 宮城県仙台市若林区 かみこひざくらちやうじゆ 遠見塚二丁目 | 04103 | 01021 | 38° 14' 27" | 140° 54' 55" | 20200511～ 20200514 | 12.0 m ² | 記録保存調査 (個人住宅建築) |
| かわいげんなないせき 中在家南遺跡 (第11次) | 宮城県仙台市若林区 かわいげんなないせき 荒井一丁目 | 04103 | 01427 | 38° 14' 36" | 140° 55' 54" | 20200522～ 20200526 | 12.0 m ² | 記録保存 (個人住宅建築) |
| かわいげんなないせき 北目城跡 (第9次) | 宮城県仙台市太白区 かわいげんなないせき 郡山字北目 | 04104 | 01029 | 38° 13' 14" | 140° 53' 55" | 20200127 | 6.0 m ² | 記録保存調査 (個人住宅建築) |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| かみひざくらちやうじゆ 上杉六、八、九 遺跡 (第2次) | 散布地 | 平安 | | 土師器、須恵器 | | | | |
| ごくちゅうじゅうめい 小鶴城跡 (第11次) | 城館跡 | 縄文、古代、 中世 | 堅穴遺構 | 縄文土器、土師器 | | | | |
| かみこひざくらちやうじゆ 南 小泉遺跡 (第87次) | 集落跡、星敷跡 | 縄文～近世 | 堅穴遺構、溝跡 | 土師器、瓦 | | | | |
| かみこひざくらちやうじゆ 南 小泉遺跡 (第88次) | 集落跡、星敷跡 | 縄文～近世 | 土坑、性格不明遺構 | 土師器、土製品 | | | | |
| かみこひざくらちやうじゆ 南 小泉遺跡 (第89次) | 集落跡、星敷跡 | 縄文～近世 | 溝跡、土坑、ピット | 土師器 | | | | |
| かわいげんなないせき 中在家南遺跡 (第11次) | 方形周溝墓、河川跡、 水田跡 | 弥生～近世 | 河川跡 | | | | | |
| かわいげんなないせき 北目城跡 (第9次) | 城館跡、集落跡、水 田跡 | 縄文～近世 | 溝跡 | | | | | |

| | |
|----|---|
| 要約 | 上杉六丁目第2次調査では、ロクロ土師器を中心として、須恵器などの古代の遺物が主に出土した。主な遺物の年代については、出土土器から9世紀中葉を中心として、9世紀代の土器が含まれているものと考えられる。 |
| | 小鶴城跡第11次調査では、古代の竪穴遺構を1基確認した。主柱穴と考えられるピットからは、8世紀前半頃と考えられる土師器の环が出土した。 |
| | 南小泉遺跡第87次調査では、竪穴遺構1基と溝跡2条を確認した。遺物は、非ロクロ土師器や須恵器が出土しており、土師器では、「関東系土器」が出土している。 |
| | 南小泉遺跡第88次調査では、土坑2基と性格不明遺構1基を確認した。遺物は、土師器、須恵器、土鍬が出土した。土師器は南小泉式期と考えられる。 |
| | 南小泉遺跡第89次調査では、溝跡2条、土坑1基、ピット4基を確認した。遺物は、南小泉式期と考えられる土師器が出土した。 |
| | 中在家南遺跡第11次調査では、河川跡を確認した。この河川は、過去の調査で確認された河川跡と同一のものと考えられる。 |
| | 北目城跡第9次調査では、溝跡を1条確認した。遺物は出土していない。 |

仙台市文化財調査報告書第491集
仙台平野の遺跡群31

令和2年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

2021年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉1丁目5-12
仙台市役所上杉分庁舎10階
文化財課 TEL 022 (214) 8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目1-14
TEL 022 (231) 2245㈹
